

---

# ピモス。

ウィリアム・輝夫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピモス。

### 【Nコード】

N8070S

### 【作者名】

ウィリアム・輝夫

### 【あらすじ】

ピモスとは何か。

ひとつのテーマにしたがって、グングン進んでゆき、そしていつかは終焉するような小説を書きます。

### 登場人物

正夫（主人公。ピモスを知っている人間）

市村貞夫（正夫の友人で空手家）

美園（市村の友人で、ニート）

## ピモス 1

春の小川の土手に自転車を置いてしばらく川の流れを眺めていた。水草がたくさん繁茂しており、そこに缶などのゴミが散らばっている。川の水は地方都市の川にしては小綺麗であったが緑色がかっていた。鳥が水面近くまで飛んで虫をとらえていた。そこまでじっと見ていて、いつまでたつてもどかな風景はのどかな風景であり、その他に何の事件もおきないので、正夫は木製のベンチに座り弁当を食べながら物思いにふけた。

この川の名は花見川である。千葉県、千葉市花見川区にある川であった。花見をするために作られた川なのであるうか、それとも花見という言葉は、この川が発祥なのか、それとも花見川という名前の川は他にもたくさんあるのか、正夫にはわからなかった。ちなみに正夫は千葉県若葉区に住んでいたのであるが、若葉区という名称は他の市にもあったし、彼の住んでいるところからすぐ近くの桜木町という名前は、本当に日本全国津々浦々どこにでもあった。そこに正夫はやり切れないものを感じた。

まるで、自分のこれまで人生のようで、誰にでもある、交換可能な、どうでもいい人生であり、正夫はこれといってそんなに優れたところのない33歳で、コンビニの夜勤のアルバイトをしているさえない男であった。午前6時にコンビニ夜勤を終えて、急に自転車に乗って、どこか知らないところに行こうと思いつき、この川にたどり着いたのである。

目を少し遠くに向けるとダンボールハウスがある。どうやらここにもホームレスが住んでいるらしい。彼らのような小世界に閉じこもって、その中で自由を満喫するのも良いかもしれない。と思うこともあった。世の中はせちがらい。生きてゆくためには何かしら耐えなくてはいけない。

正夫もそういう忍耐の心がなくて、根性がなくて、くじけそうに

なることが何度もあったが、危うく、コンビニの夜勤という誰でもできそうな仕事をして、社会の窓際の窓の棧にぶら下がっている状態であった。いつ、このようなダンボールハウスで住むようになるかわからない。さつきまで、自転車に乗って朝の町をぶらつきながら、そんな自分の自由さを感じて爽快だったのが、一気にこのダンボールハウスを見て、現実に引き戻された。

とりあえず、そんなことを思いながら、途中のコンビニで買った幕の内弁当の蓋を開ける。そして、まずシャケの切り身を、それから、ご飯を食べる。ご飯はもちもちしていて、ゴマと小さい梅干が乗っており、今、正夫が食べた部分は、梅干の置いてあった赤い跡がついている部分で、そこが異様においしく感じられた。普段食べている炊飯器のご飯とはまた別の味であった。弁当以外にも、ドロドロとしたキウイ味のジュースを買っていたので、ベンチに置いておく。すると鳩がやってきた。正夫から少し離れた場所で着地して、あちこちを見ながら、さりげなく近寄ってくる。

この鳩の一見自然な、さりげなさが嫌であった。本能か何かでそういう行動をした方がいいとわかっているのだろう。人によっては食べ物を与える場合もあるし、危ない人だったらすぐに逃げればいい。だからいつも半身であった。半身でありながら、頭の中は、弁当の中身のことしかないのだ。鳩の小さな脳では、それしか考えられないであろう。それでいながら、あちこちを向いて地面のものをつついたりして、知らぬふりをしている。

それならば、一気に直線的にこちらにやってきて何故、ねだらないのであるうか。そっちの方がまだ気分がいい。何故、知らないふりをするのだ。本当はものすごく食べたいくせに。この幕の内弁当を。正夫は地面にあった小石を投げる。知らぬふりをしていた鳩は急にさつとそこに特攻するが小石であったので、また同じようにあつちをキョロキョロこつちをキョロキョロし始めた。

この俗悪なる鳩のせいで、せつかく感じていた春の景色を、正夫は

ぶち壊しにされたような気分であった。急いで、立ち上がり、別の場所で食べるために、弁当は半分残しビニール袋に入れて手に取って、鳩を踏みつけるように、急に自転車まで走って乗る。そして漕いだ。

鳩は慌てて逃げ出す。多分、あつ、こいつはヒネクレものだな、くらいにしか思わないだろう。そして、数秒後には自分のやっていくる俗悪な行動を忘れ、また別の誰かを見つけてやるに違いない。能天気な人ならば、あつ、鳩、可愛いわね、とかいって餌をあげるに違いない。そうやって鳩をつけあがらせるのだ。

「鳩をつけあがらせるなっ！」

正夫は、自転車を走らせながら叫んだ。その声は、春の小川の花見川に響き渡った。

## ピモス 2

正夫は自転車を漕いでもう3時間くらいになろうとしていた。さすがに疲れて、尻も痛くなってきた。正夫は尻にできものがいくつがあつて、それが確実に二つ以上はつぶれた。だから尻の椅子につける位置を少しずつ変えたがそれもだんだん苦しくなってきた。さっきのところから少し離れて、小さな公園があつたので、そのベンチに座つて弁当をたいらげた。

どうして、花見川にやつてきたのか。それは自分でもよくわからないが、どこかで今、この時期が自分の人生の節目ではないかと思つたのかもしれない。正夫が、高校を卒業して浪人をしていたときに、一回、花見川に自転車で行ったことがあつたのだ。浪人時代はあまりに暇で、どれくらい暇かというと、トルストイの『戦争と平和』を読破したくらい暇であつた。今ではどんな話であるかさっぱり覚えていない。花見川に行ったとき、正夫は意気消沈していたが、今こそが人生の節目なんだ、頑張れ！と自分を励ました。それで大学に受かつたのである。

だが、本当はそういうことではなくて、高校時代に好きだつた女の子のことを思い出したのかもしれない。彼女は、〇ということにしておこう。高校一年のときに、朝、一緒にしばらく会話して、それで一気に正夫が好きになつたのである。しかし、正夫は自分に自信がなかつたので話しかけられなかつた。話しかえられないまま高校三年生になり卒業してしまつたのである。

正夫は〇のどこが気に入つたのか。それは、まず、ふくらはぎの太さであつた。丸っこくなくて、撫でてみたくなるような、ふくらはぎなのである。あのふくらはぎの出来具合は完璧ではなかつたろうか。太りすぎず、痩せすぎず。大根ではなく、蕪でもなく、それでいて痩せすぎたレンコンでもなく、均整が本当に取れていた。

そして肌が白かった。その太りすぎず、痩せすぎずというのが、頬からあごにかけてのラインもそうであった。それでいて、鼻は高く、瞳は大きく、どこか眉の辺りがノーブルであった。そして声、実に優しい抱擁感のある声だったのである。それらが、美のハーモニーを正夫に見せてくれた。おかげで、彼女は小柄だったが、まるで観音様のように思えた。それで声をかけることができなかったのかも知れない。

浪人時代に、よく彼女の妄想をしていたものである。日常が〇という女性のことを考えることに費やされていた。もうほとんどストーカーみたいなもので、花見川に行つたのもひよつとしたら彼女に会えるかも知れない、と思つたのかも知れなかつた。多分、『戦争と平和』の主人公の恋人のことも、彼女のことと思ひ、主人公は自分だと思つていたのかも知れない。

もし偶然、出会つたとしたら、ひよつとすると正夫はいきなり襲い掛かつたかも知れない。それほどの妄念であつた。浪人時代の考えていることの三分の一は彼女のことだつたかも知れない。夕方になると、よく悲しんだものであつた。悲しむも何も何も起きていないのであるが、彼女に関するささいな記憶がどんどん掘り起こされて、涙が溢れてくるのだ。

ある日、あまりにもそれが苦しいので、彼女に電話をしたのである。彼女は、正夫の気持ち悪い行動に、若干引きながらも、いろいろ慰めてくれた。それに対して

「いやいや、俺はそんなんじゃないよ」

「いやいや、俺はそんなんじゃないよ」

と否定しているついに彼女は少し切れて

「この場合、そう慰めるしかないでしょ」

と本当のことを言い出した。

「あつ、ごめん。」

俺、馬鹿だつたよ。

それじゃあ、さようなら」

と、いって電話を切ったのだ。

あのときの思いが、花見川に行くとき蘇る。あれは何だったのだろう。あの想念は……。正夫の中に一人の人物が生まれていた。〇という実在の人間とは違う人が。

「ピモス。

ピモス。

ピモス」

と不意にどこかから声がした。

### ピモス 3

これは耳鳴りではないか、と思った。というのもその声はあまりにも高音で人間の出すような声ではないからである。しかし、ひよつとしたら声の高い女性ならば出すことができる音域かもしれないし、男でも裏声で何とか出せるのかもしれない。一番、確実なのは耳鳴りであることであるが、あいにくと、最近耳の調子は良く、今も耳を押えてみたが、別に何ともない。やはり、これは、れっきとした人間の声なのだ。

Oの声ではなかった。彼女の声はよく覚えていた。女性の声を9段階に分けるとして、中の上くらいの高さであった。声の響く、底の部分に、どこか笑っているようなゆらぎがあった。それがうまく地の声と合わさって幼い感じを出していた。彼女の声をきいていると、明るくて快活でどこか幼い女性という女性像が浮かんでくるのである。正夫はその女性像に夢中になったのだ。

だが、今回の声はOの声とは関係がない。14年ぶりに訪ねてきて、もしOの声がしたら、それは幻聴だったかもしれない。落語で冬に寒さで固まった「おはよう」という声が、春になると溶け出して、そこかしこで「おはよう、おはよう」といい始める、という笑い話があるが、まさにそのような現象で、つまり現実に起きるわけがない。しかし、明らかにきこえたのである。嘘ではなかった。そもそもどうしてそんなわけのわからない嘘をつく必要があるだろうか。誰の得にもならない。

「ピモス。」

ピモス。

「ピモス」

また声がした。一回目は、よくわからなかったが、二回目は正夫にはちゃんとピモス、と聞き取れた。ピモスとは、何であろうか。日本語ではない。何語であろうか。何語でもないのか。

日本語ではない。何語であろうか。何語でもないのか。

声のした方、公園の櫛の向うに吸い寄せられるように足を運ばせると、粗末なジャンパーを着たハゲ頭で髭面のホームレスが空き缶をゴミ袋に入れてカートで運んでいた。

この人が高音でピモスと連呼することはないだろうなあ、と思いつながら正夫は近寄ってきいてみた。

「あ、何。俺が。そんな高い音出ないよ。何か病気なんじゃないのか。えつ、ピモス。ピモス。ピモス。何だ。そりゃ。違うよ。俺じゃないよ。何でそんなことしなきゃいけないんだよ、俺が。意味ないじゃないか。あんた疲れているんじゃないのか。休んだ方がいいよ」

「そうですねえ」

正夫はどうやら自分の頭がおかしくなったのか、と危惧しつつも、先ほどの場所まで戻り、再び自転車に乗ろうとすると

「ピモス。」

ピモス。

ピモス」

また声がした。

それは高く、麗しくも思える声で、冷静にきくと人間でも出せそうな声であった。しかし、正夫の記憶ではそんな声を出す女性に会ったことはない。テレビで見たことがあるかもしれない。オペラ歌手とかで、同じような声を出す女性がいる。だが、ピモスとはいっていないかった。

正夫は自転車に乗り、これも夜勤明けのせいだ。早く家に帰ろうと、家路を見つけようとしていたときに、またピモスの声が発生して、ふと見ると、目の前にリサイクルショップ「風鈴亭」があった。正夫はリサイクル商品を見るのが好きなので、寄ってみることにする。

## ピモス 4

「ピモス？」

リサイクル店の店主、沢渡茂男（どこかにその名前が書いてあったのでわかったのである）は、目を大きくして正夫のいった言葉を繰り返した。話は前後するが、本来、正夫はそのことを話さずに、適当に店内を見て、帰ろうかと思ったのであるが、店に入って、沢渡の顔を見たときに、何か稲妻が走った。

彼は、頭は、6割方、ハゲ渡っていた。左右に、黒い茂みがあり、頭頂部にひと房の毛が天に向かってチョンと伸びているところが、普通の気の毒なハゲと、彼みたいなおしゃれなハゲとを分けている境界線であった。だが、正夫が惹きつけられたのは、その頭髪ではない。

彼の目であった。彼の目は、ビー玉のように光が乱反射していて、一見、あらゆるものを見逃していそうで、大切なものはしっかりと見ている。という感じがした。しかし、それは同時に、あらゆるものを見通しているように見えて、大切なものは見逃しているような目にも見えた。つまり、何だかわからないが、やたら迫力のある目だったのである。

その目をじつと見ていて、十分くらいたったのだらうか、いやそれは一分だったかもしれないが、店主が話しかけてきたのだ。

「お客さん、どうしました。」

止まっちゃって」

「あ、すみません。」

あのー、何ていっていいか」

「はあ」

正夫は今の自分の状況を正直に話そうか話すまいかしばし悩んだが、ここまできたら話してもかまわないだらう、とできるだけ正確に話したのである。

「さつきですね。僕は公園にいたんですが、そこで、ベンチに座って、弁当を食べていたら、ピモス、ピモス、ピモス。という女性みtainな高い声が出てきたんです。誰の声だろうか。って見回してみたんですが、辺りには、ホームレスしかいませんでした。だから、僕はおかしいな、って思っただんですが、何でしょうかね。あれ。小鳥ですかね。その声がこの店の前でもしたんですよ。それで、ふらっつとやってきたんですがね」

店主は、しばし一直線に彼を見ていたが、ピモスという言葉を自分の中で確かめた後で、首を横に振る。

「わからないねえ。」

それって、小鳥の鳴き声とかじゃないの。

小鳥の鳴き声って、ピモスってきこえるときもあるし」

「違うんです。」

小鳥じゃないんです。

多分、人間なんです」

と正夫は、両の手をしっかり握って強く否定した。だが、次の瞬間、どうして自分が強く否定したのか、よくわからなくなっていた。小鳥でもいいし、いや、むしろ、それは小鳥以外には考えられないような現象ではなかったらどうか。

「じゃあ、神の声とか。」

何かそういうことをいいたいの。

おたくは」

「そういうことでもないんです。ただ、このピモスというのは、僕の中、あるいは外、いや…外なんてないか…でも、その、つまり、何か特別なものなんじゃないか、って思うんですね」

「そう。」

じゃあ、それはあまり他人にいつちゃあいけないのかもしれないよ」

「そうですね。」

じゃあ、すみませんでした」

正夫は去ろうとする。

「ちよつと、待って！」

目を異様に輝かせて店主は引き止めた。

## ピモス 5

「この店の前でピモスという言葉がきこえたのなら、この店に關係があるのかもしれないよ。だから、どうだろう。この店で何か買つていきなよ」

と店主はいった。

「それは確かにそうかもしれないけれども、冷静に考えると、ピモスという言葉が僕にとって、良いものか悪いものか、わからないじゃないですか。

そのようなものののに、その声に従う必要はあるんですかね。っていうか、この店で商品を買う、ということ、ピモスと何の關係があるのかもわからないし」

「ピモスではなくて、ピースかもしれないですよ。だとしたら、ラブアンドピース、ってことでしょう。この店にもありますよ。ほら、ジョン・レノンのCD」

正夫が値段を見ると3980円であった。

「うーん。そうですか」

「あのイマジンという名曲も入ってますよ」

「うーん」

正夫は唸った。正直、1980円なら悩まなかった。ジョン・レノンはいいい曲を作っているに決まっている。それほど、というかまったく知らなかったが、世界的名声のことは、さすがに正夫も聞き及んでいる。だが、それが今の正夫のポケットの中から3980円を出させるかどうかというと逡巡せざるをえないものがあつた。

そして、ピモスとレノン、この二つは關係があるのだろうか。正夫の中では、ピモスというものは、ジョン・レノンよりも高い位置を飛んでいるような気がした。高いのが良いとか、悪いとかそういう問題ではなくて、漠然と雲の上を飛んでいるのがピモスなのだ。だとしたら、それにふさわしいものを見つけないかはいけないが、

レノンは立派過ぎた。

彼のことを涙を浮かべて褒める人は、地球上にたくさんいるだろう。だが、それはピモスほどの深さであるかどうか。ピモスの占めている独特な位置を知りうるほどのものであるうか。レノンが深くないというのではないが、ピモスはレノンよりも上をいつているような、そんな気配がどこかに漂うのだ。平和よりも深いということがありうるであろうか。ありうる。何故なら平和よりももっと大きなものを人々は抱えているから、いつまでたっても完全なる世界平和は実現しないのだ。

だが、正夫自体は、翻ってピモスとは何かを考えるとわからないのである。本当にレノンを越える、もしくはポスト・レノンといえるべきものなのであるうか。それほどのものではないのかもしれない。そもそもが正夫のレノン理解が浅いから、ピモスなんぞにレノンが越されるのである、という見方も成り立った。

だが、正夫はここまで考えていて、思考力がポキ、と音を立てて折れたようなそんな状況になった。レノンでいいや。グダグダいうな。レノン＝ピモスだ。

「あああ、もう、いろいろ考えるの面倒なので、ジョン・レノンのCDにします」

「ありがとうございます」

という店主に、レノンのCDを渡そうとして、正夫は手を止める。CDケースが異様に軽いのだ。

「まさか」

開けてみると、中に何も入っていなかった。

「これで、また選びなおしですね」

この偶然が、正夫にとって不幸だったのか、ジョン・レノンにとって不幸だったのかはわからない。両方にとってどうでもいいことであるかもしれなかった。

## ピモス 6

それから、正夫は例のリサイクルショップで、野球帽のような緑色の帽子を買い、それを被って、再び花見川に向かった。自転車のタイヤの空気が少し抜けていたのが気にかかったが、多分、これくらいなら大丈夫であろう、という程度であった。

川の水は小さく小刻みに波立てながら下流へ下流へと流れていた。正夫は太った男の腹を連想した。それにしても、何で細かい波ができるのだろうか。すつーと一直線に行かないのだろうか。どこかの部分が流れに対して抵抗している。川の流れが速いので、空気抵抗が生じているのであろうか。正夫はそんなことを思いながら川を眺め、周りの景色を眺めた。

草、遠くの建物、朝靄、楓、樺、空色の空、他に特筆すべきものはなかったが、その配合が何か正夫の中にあるものを喚起させた。それは、もちろんピモス以外の何かであった。19歳のとき、正夫は同じ景色を見ていた。

愛しいOの思い出である。あの恋は片恋ではなかった。実は、朝に彼女が話しかけてきたのは、わざとであった。彼女の方で正夫に気があったのらしい。しかし、正夫は何だかわからないが、緊張して彼女に話しかけることができなかった。そのまま、お互い見合っで、話をするともなく時間が過ぎた。あれは何だったのだろうか。正夫は恋よりも勉強しなきゃと思ったこともたしかであるが、別に恋をしても良かった。だが、バリアーのようなものが彼女に張っていた。正夫は彼女に電話する。話は、不思議にはかどった。盛り上がりもした。

しかし、目の前になると、彼女の美しさが際立って、正夫に対するバリアーになった。冷静に思い返してみれば、彼女はある角度から見たら、たしかに美しいが、普通と異なるところが普通であった。それなのに、どうして話せないのだろうか。

こう着状態はずつと続き、ついに彼女の友人が彼女を正夫の方へふつとばし、彼女が正夫に当たったが、正夫は逃げてしまった。何だかわからないが、引力とは正反対の斥力が働いていた。正夫の中で抵抗があった。

あるとき、彼女は、正夫の手首をつかんで、微笑んで顔を近寄せてきたが、正夫はまた逃げた。それはとても嬉しいことであったが、どうしてか、腰が引けた。何か二人の間には、もしくは彼女の中にもしくは正夫の中に合わないものがあつた。そこで、彼女の術策に落ちるよりは、逃げた方が良かった。

でも、どうしてだろう。

ありふれた恋には俺は落ちないぞ。という気持ちがあつたのだろうか。それが今、こうして33歳のろくでもない人間になって、あのころと同じ川を眺めている。川はもちろん人間によっていろいろ変えられたであろう。水質も変つたであろう。だが、川が流れていることは同じであつた。正夫の心の流れも同じであつた。

美しいものの中にある恐怖。それを感じたのであろうか。わからないが、とにかく居心地が悪いものであつた。その割りに遠くにいると愛しく感じる。幻として、くつきり浮かびあがってくる。それこそピモスであつたのか。

でも、ピモスとは関係のないことなのだ。こういつたことは。それでも大切な正夫の思い出であつた。自分はあれから成長した。女性とも何人かつきあつた。でも、今は一人であつた。結局は、戻ってくる。あの思い出が、いつも正夫を苦しみに包んだが、それは同時に慰撫もしていた。〇は一体何だったのであろうか。ピモスとは関係ないが、ある意味、ピモスよりも奥深い謎であつた。

## ピモス 7

正夫は自転車に乗って帰路を辿っていた。千葉市花見川区から、佐倉、四街道と行って、若葉区にある自宅へと戻るのだ。本当に長い時間乗り続けていた。途中で寄ったコンビニで時計を見ると、12時であった。

テレビの「笑っていいとも」がやっている時間である。それにしてもこの番組は、もう三十年くらいやっているのであるが、気になることが一つあった。どうして「笑って、いいとも」と、正夫たちに許可するのであるうか。誰かが笑ってはいけない、と命令したのであるうか。そんなはずはない。だとしたら、いわれなくとも「笑っていい」のである。

だが、我々は、許可されて笑っている。ここなのだ。笑いは、長い間、テレビによって拘束されていたのである。そして、それは、今もそうである。日本人は笑わない。というのではなくて、テレビによって笑いが独占されていて、テレビを見るか、テレビのマネをするかしないと、笑ってはいけないのだ。独占禁止法違反である。

そして、頭の中で、独占禁止法違反という言葉を繰り返して、正夫ははつとする。独占禁止法違反。何てややこしい言葉であろうか。独占するな！でいいのだ。しかし、それではニュアンスが違う。独占だめだよ。でもおかしい。独占よくないよ！これも、違う。ここは独占禁止法違反なのであるが、しかし、この二重否定は、きいていて頭が朦朧としてくる。

つまり、この現代の日本は、笑いは許可制であり、笑いの独占は独占禁止法違反の状態にあるのだ。だが、いつの時代でも権力を握るのは、実は禁止されていないものを禁止する人にあるのではないだろうか。あの番組の司会のタモリは、別につけなくてもいいのにサングラスをつけている。地方に行くと、タモリの古ぼけた看板があつて、たまに笑ってしまうが、あまねく日本の隅々まで知れ渡っ

ているタモリはそういうものの象徴なのだ。いつのまにか、笑いと  
いう自然発生物は、許可されてテレビで配給されるものになってし  
まった。

それを考えるとピモスも似ている。今、正夫の中にはピモス、と  
いう新しい何かがあった。それを正夫がつかむことにより、独占で  
きるのではないだろうか。ピモスをいち早く具現化して、それを獲  
得し、使いこなすことによって、タモリのように正夫はスターにな  
れるかもしれない。そして、そのピモスの鍵を握っているのは、先  
ほど、リサイクルショップで買ったこの緑の帽子であった。

正夫は、途中、自転車を横転させる。何でもないと道だったのであ  
るが、ペダルを踏み間違えて、すっ転んだ。緑の帽子は、正夫の頭  
からするっと取れて、近くの水溜りの中に突っ込んだ。正夫は、帽  
子を取り上げるが、ドロドロになっている。しょうがないので、自  
転車の前の籠の中に入れて、家に帰る。

家に帰ったらすぐに寝た。それから、次の日の朝になって、正夫  
は緑色の帽子がなくなっていることに気づく。母親にきいてみると、

「あ、あのドロドロの帽子ね。

汚いから捨てちゃったわよ」

とにべもない返事が返ってきた。

「あれ捨てちゃったの。」

何てことしてくれたんだよ」

ゴミ箱に行くが、その日はゴミ収集の日で、中は空っぽであった。

「あれはピモスなんだよ」

「はあ、何それ」

「あれは、だから、ピモスなのに」

正夫はため息をつく。しかし、所詮、正夫の人間としての度量は  
こんなものなのかもしれない。

## ピモス 8

「ピモスねえ」

市村貞夫は、東京都中野区にあるファミレスで、妙に姿勢をよくして神妙な顔つきをして正夫の話をきいていた。時間は午前2時。二人は数ヶ月に一回、会う習慣になっていた。二人が並んでいると本当に凸凹コンビであり、正夫は背が高く、市村は背が低めであった。でも、どっちが整った顔かというと、市村の方が整っていた。土佐の人間なのであるが、目鼻立ちがはつきりとしていて、イタリアの血でもどこかに混じっているのかというほどであった。そして、ややこしいことに、市村は正夫にとって先輩だったのであるが、二歳差なのに、市村の方が若々しく見えた。正夫は33歳のガタイがでかい、さえない男という感じであった。

「何だかわかったような、わからないような話だねえ」

「というと、ドリンクバーにドリンクを取りに行った。」

「まったく雲をつかむような話ですよね」

市村は、正夫の分のドリンクももってきてくれた。正夫は、烏龍茶しか飲まなかった。それはいつでもそうであった。コンビ二でもいつも烏龍茶の紙パックを買っていた。

数日前であろうか、コンビ二夜勤をしたときに、中国では絶対に烏龍茶を冷やさない。烏龍茶を冷やすのは毒だ、と叫んだ男の客がいた。正夫は、そのことがずっと気になっていた。あれは科学的根拠があるのか、それとも頭がおかしいのか。ピモスの話題から、そっちの方に話は移る。

「中国では、どうやらドリンクは冷やさないで常温らしいんだよ。テレビで見たよ」

「へえ。」

「やっぱり、あの男は頭がおかしかったんですね」

「それはそうだよ。もし、体に悪かったら、健康被害とか起きてい

るだろうに」

「でしようねえ。」

それにそれをいつているときの、その男の目が尋常じゃなさそうだったから。

そう考えると、ピモスもそうかもしれない。

もし、本当にあるのなら、誰かがピモスのことを口に行っているに決まっているし」

「夜勤明けの幻聴でしょうね」

「うん。」

やっぱりそうなんでしょうねえ」

話はそれから、市村の兄弟子の美園という人物へと移る。市村は空手をやっていて、その道場の先輩が美園なのであるが、年齢は38歳、身長が170くらいで体重が100キロを越えており、どこかがひしゃげたような顔をしていて、糖尿病を抱え、現在は二一トで、家の人からお金をもらって生きていた。自律神経失調症で、さらに、自分をアダルトチルドレンといっているが、数少ない友人の一人、市村の見立てによると、アスペルガーじゃないか、ということとらしかつた。

「それにしても美園さんって本当にいいところないですよね」

「いいところないねえ。」

家が金持ちというところしかないんじゃないかと思うねえ」

「でも、それはおつきいけれども」

「近々、死んじゃうんじゃないか、とも思うねえ」

「死ぬ前に一回会いたいかもしれない」

「向うも会いたがっていたよ」

市村と会うと、大体、美園の話になり、美園はいかにダメな人間か、ということになる。たとえば、中学時代に「俺は早稲田慶応以上を出た人間としか相手にしない」といっておいて、自分は病気になるに受験に失敗して、高校は通信教育で大学にも行けなかったから、中学の友人から相手にされていない。とか。妹に一回やらせてくれ。

と迫ったことがあるとか。親父に日本刀で切りつけられそうになつたとか。会社の軽トラで知らない人の家の塀に激突して塀を壊したとか。それからコンビニの夜勤をやったら一緒に夜勤をやっていた相手が絶叫して、彼の胸ぐらをつかんでぶつ倒されたとか（多分、美園が原因で）。空手の弟子にコップの水をぶちまけられて殴られたとか。（空手をする人間が兄弟子にそういうことをするというのは相当なことらしい）師匠に「あいつは可哀そうな人間だから友人になってあげてくれ」といわれたりとか、大人の玩具を持参して風俗店に行つて使おうとしたら風俗嬢に断られたりとか、2チャンで名指しで豚と書き込まれていたりとか、そんな話ばかりであった。

正夫にしてみれば、そんな美園さんに興味もないし、すべてどうでも良い話であつたが、特に他に話す話もないのできいていた。

「俺が覚えているのは、僕、糖尿病なんだよ。といつておいて、目の前で、一リットルパックのコーヒー牛乳を飲み干したことですな。

何してんだ、こいつ。と。

それを見ていて頭がクラクラしましたもの」

「もう本当に最悪だよな。でも美園さんは、何だかんだいって金持ちだし、俺もお金を借りていたりしているから、あんまり強いこといえないんだよね。でも一緒にいるとストレスがたまるんだよ。だつて、アスペルガーだから」

「はあ」

何でそんな人とききあっているのかわからないけれども、多分、市村も淋しいのだろうなあとと思う。それにしても彼が繰り返している、アスペルガーとは何であろうか。それをきくと、

「自分のことしかわからない、他人のことを考えられない先天性の病みみたいなものらしいね」

「はあ、そうなんですか」

そんなどうでもいいことを話しているうちに、3時になりお互い

に話すことがなくなって眠たくなっていたときに、ある事件が発生した。とはいっても、どうでもいい事件でもあったが。

## ピモス 9

「何だ、コラッ！」

17、18歳の生意気な少年らが数人いて女の店員に対して啖呵を切ったのであった。その中で、背の小さい、架空の生物の麒麟みたいなヘアスタイルをした少年が、

「お前さ。

絶対にやるからな！

外で待っているからな。

いいかげんにしろよ、コラ」

みたいなことをいつていた。

女の店員は平謝りしていたがきいていないらしい。

その場にいた客は皆、少年より年上であつたが、もちろん、関わりあいにあいたくないので、目をそらしていた。

少年たちが外に出たとたん、正夫は真っ先に話題にした。

「いるんだよね。」

ああいう馬鹿が。

にしても原因は何ですかね」

「原因は何にせよ、むかつくな。」

生意気なアホガキめ。

俺の今の腕だと、二人を相手にするのがいいところだろうね。

二人を一瞬の内にとつちめてあとは逃げる、って感じだろうね」

「ほう」

「それ以上だとやられる。」

8人いたね。

あれじゃダメだ。

今の俺の腕じゃ」

と、まるで未来にはできるような風に話していた。

「俺は無理ですね。」

警察呼べばいいのに」

「あれはもう、酷いよね」

「しかも外で待つんですかね。」

「この寒い中」

「それって、かつこ悪いよね」

「ふふふふ」

「にしても、これからどうしようかなあ。もうやること、なくなっちゃったね」

このとき、市村の中の野獣が目を覚ましたのであろうか、彼にしてみたらしなくてもない提案をしたのである。

「メイドバー』ほいつぶ』にでも行くか」

「えっ」

「行ってみようか」

「本当ですか。」

まあ、行ってもいいんですがね」

メイドバー』ほいつぶ』は、正夫が何回か行ったところであった。ネットで知り合ったメイドバーが好きな人がいて、その人と一緒に四回くらい行ったのである。正夫はそのことを少し自慢げに話していた。自慢することもそんなにないことなのであるが。

「ちよつと待つてくださいいね。」

俺、そんなにメイドさんたちと親しくないですよ。それでもいいんですか」

「ああ、いいよ」

「あんまり、市村さんが行っても楽しくないと思いますよ」

市村は独特な性格であった。表面的には、温厚なのであるが、どうでもいいことですぐに切れる人間なのである。本当にどうでもいいことでよく切れた。

たとえば、これはもう十年くらい前の話であるが、市村の家に行ったときに、彼が外出して帰ってきたときに、ビデオの電源がオンにしてあった。市村はそれに切れた。

「使わないんなら電源オフだろう」

「そうですね」

とそのときはかわしたが、よほど気に食わなかったらしく、何度も何度もネチネチとそのことをいい、正夫が家から出るときに

「マサさん」

「はい」

「ビデオの電源は切ってくれよ。」

頼むから」

と十数回目の念押しをされたほどである。

彼はファミレスのバイトをしているのであるが、それにもかかわらず、飲食店で少しでもマナーがおかしいと怒った。

「もうこの店から出て行こう」

というのを何回もきいた。

そんな人間が、メイドバーに行くとうなるのだろうか。ある意味、興味深いことでもあった。メイドさんは、あたり前のことであるが変なことをしてくる。アニメの女の子みたいなきことをしてくる。

それに対して、腹を立てる人はいるだろう。市村はそういうものに真っ先に腹を立てそうな人間である。だが、市村はその反面、『涼宮ハルヒの憂鬱』を全巻そろえるほどのオタクでもあった。彼の中で、空手家としての彼とオタクとしての彼が衝突し、火花を散らすのかもしれない。

結局、どっちが勝つのだろうか。それは確かに面白い見ものだったに違いないが、しかし、わざわざそんなものを見るに、メイドバーに行く必要があるのか、正夫にはわからなかった。

「何度もいいますが、俺自身は、メイドバーって苦手なんですよ。」

そこは覚えておいてくださいね」

「うん」

という事前の確認をしてから、ファミレスから歩いて五分のメイドバー『ほいつぶ』に二人は向かうのであった。もちろん、外には

生意気な少年たちはいなかった。

ごみごみした通りを曲がって、目印の黒板を見つげ、メイドバー『ほいつぷ』への狭い階段を上ってゆく。そして、踊り場のようになっっているところから2、3段昇ると、入り口になっていた。ガラスのドアを開け、中に入ると、メイドさんが3人いて、『いらっしやいませえ、ご主人様』と迎えてくれる。

カウンター席には20代のお客が4人いた。意外なことに結構、カッコイイ客もいる。というか、これは偶然かもしれないが、この『ほいつぷ』では、典型的なオタクみたいなのは少数派のような気がした。もっとも、正夫はオタクの分類であろうが。

何回見ても、メイド服というファッションに圧倒される。頭がクラクラする。メイドとは何であろうか。そもそも自分とは何であろうか。わからなくなってくる。どうして今、メイドが目の前にいるのか。それはメイドバーに自分が行ったからである。当然のことであるが、しかし、こういつたことはすべて、正夫自身の意思ではなかった。流れでこういうことになっていた。メイドは嫌いではないが、このどうしたらいいのかわからない空気は何であろう。と、ついつい自問するが、もちろん答えは見えない。

テーブル席に座ると、市村は顔を赤くして緊張していた。正夫も少し緊張していたが、そこはもう5回目なので、大したこともないしかし、その場にいたメイドは3人であったが、まったく知らないメイドたちであった。そして、知っているメイドでもそんなに盛り上がらないに決まっている。

といっても決まっているかどうかはわからないが、何故か、正夫はもう対面でメイドで話して盛り上がるうということとは放棄している節があった。じゃあ、店に入るな。ということになるだろうが、まさにそうなのだ。しかし、市村が入りたがっているのだから、入

るしかあるまい。市村の誘いを断る、ということもできたが、それは何故かしなかった。

そんな二人を前にして、メイドはどうしたらいいのであるうか。これは、正夫にもわからない。メイドさんならどうにかしてくれるかも。という淡い期待はあるが、簡単にどうにかして欲しくはないなあ、という気もあつた。つまりそれぞれの個性を尊重しつつもわからないようにさばいて欲しいという気持ちであつた。

が、この二人にどんな個性があるというのか。正夫は、でかい、コンビニ夜勤。市村は、空手家、ファミレスの厨房というだけであつた。しかも正夫は33歳、市村は35歳！その上、今の2人に年齢からくる大人の余裕なんてものは一切なかった。

ご主人様なんて柄ではなかった。それを考えたら他の客もご主人様という柄ではなかったが、中野という町の空気になじんでいた。しかし、正夫と市村は違つた。群衆の中の孤独、という文字を引張つて歩いているような陰気臭い顔をしていた。

しかももうお互いに話すネタもないので、正夫は黙って周りのものをいじっているか、PSPのクソ詰まらないゲーム（これが本当に泣きたくなるほど詰まらないゲームであつた）をしているしかなくかつたし、市村は背筋をしゃんとして顔を赤くしてボーとしているしかなかった。

たまにネモちゃんというお店でナンバーワンかもしれない美しいメイドがきて相手してくれた。彼女は両手を丸めて双眼鏡みたいな格好にして現れたり、「今日は特別イベントの日ですう」とか叫んだり、手を猫のようにして「ニャンニャン」とかいつてくれたりした。

それに対して、市村は無表情、正夫は半笑いで応じることしかできなかつた。そして、正夫は当たり前障りのないことをいう。この店にまつわる情報を一通りいい、ネタが尽きたら黙つた。そして、市村は緊張した面持ちのまま話しかける。

「そつういえば、きこうでんみさ、つていたねえ。

ハキューンとかいていたアイドル。

知っている？」

「えっ、知らないです」

「そう。」

古いかなあ。

そういえば、その娘、AV女優になつたらしいね」

しばらく沈黙が辺りを包んだ。

「知らない人の話の上に、シモネタかよ！」

正夫は驚いた。

市村はたまに、どうして、この人、そんなに不器用なんだろう、と感心するほど、ものすごく的外れなことをいう人物であったが、まさかここまで外すとは思わなかった。外し界のホームラン王ではないか、とも思えた。

ネモちゃんはどうするのかと思つたら、

「あっ、ご主人様。

ふにゃらら」

と、他のテーブル席へ飛んでいってしまった。

残された2人は顔を見合わせる。市村の彫りの深い顔が影になつて、北斗の拳のケンシロウみたいになつていた。

「いや、それは…その」

「何か、やつちやつたかなあ」

市村は苦笑する。

つまりは、結論からいうと、そんな2人はメイドバーに行くべき人間ではなかったのである。そして、それは如実に、2時間後、朝の5時ごろに、メイドバーから出てきた2人の憔悴し切った表情に現れていた。

二人は暗い気分で、メイドバーから出て朝焼けの中野の町の中を、坂を下ったり上ったりしながら新宿方面へと向かっていた。

「それにしても、俺はダメだったね」

市村は呟いた。

「マサさんは、結構、なじんでいたじゃないか」

それに対して、正夫はもちろん否定する。

「そうでもないですがね」

「いや、マサさんは、良かったんだよ。」

俺は緊張して、本来の自分を出せなかったな」

「本来の自分ですか」

「そうだよ。」

ああいうところでも、自然にできないとダメだね。

一人の格闘家として失格だ」

「いや、多分、格闘家であることと、メイドバーで緊張しないことと全く関係ないですよ」

「あるね！」

それは関係あるね！」

何故かそこだけは市村は強情に否定した。

二人は、城山公園にいた。そのベンチではたまにホームレスがいるのであるが今日はいなかった。それにしても、やけに風がぬるく生暖かかった。二人はしばしベンチで休む。

「そのね…俺が悪かったんだな。多分、俺が悪かったんだよ。もっとテンションを上げて接するべきだったんだ。あんな風じゃダメだったんだよ。」

でも、それにしても、マサさんは五回目だろう。それにしては…」

「そうですねよ。」

俺、盛り上げようとか、メイドさんに気の効いたジョークでもいって笑わせようとか、一切思いませんでしたね。っていうか、できないんですよ。もう俺、ジョークとか、わかんないんですよ。そういう意味では退化しているかもしれない。

ただ、目の前のものを見て、それに合わせる。今の俺にはそれで精一杯ですね。

「すみません」

「いや、それは、謝ることもないよ。ただ、あんな結果になった、つてのが何ともねえ。本当に暗くなるよね」

「多分、今の俺のいるステージが、メイドのいる層と違うのかもしれない。今の俺って、ほら、どこか上にいるんですよ。雲の上というかね」

正夫は天を見上げた。本当に綺麗なオレンジ色の陽光が斜めに伸びていた。

「にしても、俺は前もって断ったじゃないですか。そんなに行つてもどうつてことないですよ、って。楽しいということもないですよ、って。それなのに、何で行こうとしたんですか」

「いやあ、まさかあそこまで寒いとは思わなかったんだよ」

市村のその言葉に、正夫は傷ついた。前もってそんなに期待をしないでという意味のことをいつていたのに、市村は実は期待していたのである。

ひよっとしたら、市村は昔の頻繁にギャグを飛ばす正夫のことを思い出していたのかもしれない。だが、あのときの正夫は今はどこにいない。正夫は、何かを失ってしまっていた。

「そうですね」

つまり、俺が5回も通っているのに、何であんなに寒いんだってことですか……。だって、俺、いつも隅っこでニコニコしているだけでしたもの。メイドさんと会話とか少ししかしなかったですもの。相槌とか、そんなんばかりでしたもの。

そもそも俺にはメイドバーは無理なんですよ。だって、何か照れ

くさいじゃないですか」

「俺もすつごく照れてダメだったなあ。

ちつくしょう！」

という二人は歩き始めた。

初め、新宿まで歩く予定であったが、新大久保の駅で電車に乗ることにする。プラットホームで、正夫は今自分に起こっているありのままを話す。

「つまり、俺はもうジョークとかギャグとかできなくなっているんですよ。自分でもわからないけれども、俺の中で何かが変わっているんですよ。まるで蛹が蝶になるように」

「そうなのか。で、蝶になったらどうするんだい」

「どうなるかはわかりません。」

ただ、メイドバーには行かないでしょう」

「そうだな。」

メイドバーは俺たちの間の黒歴史ということ、闇に葬り去ろう」

「ですね」

とはいっても、正夫は機会があったらメイドバーには行こうと考えていた。やはりネモちゃんも可愛らしかった。多分、問題は、正夫と市村という組み合わせにあったのだ。二人は何年か前は面白い面白い二人組であったが、いつのまにか、たんなる暗いおっさんたちになっていた。しかし、何年か前に、本当に明るい面白い二人だったのだろうか。本当はそう勘違いしている根暗な二人だったのかもしれない。

いや、冷静に考えると、市村は何だかんだいっても、恋人もちやんといて同棲している。友人も多い。彼は恵まれているのだ。

しかし、正夫は恋人もいない。友人も多分、2、3人しかいない。本当に惨めな悲しい存在なのだ。下手をすると、市村も正夫以外の人間とメイドバーに行ったのなら楽しいひとときを送れたかもしれない。しかもそれが5回目だとしたら、かなりの確率で楽しいひと

ときを送れたであろう。だが、正夫はそんな人間ではなかった。

メイドバーキラー正夫。

ふとそんなあだ名が彼の脳裏に浮かぶ。

いっそうに暗くなつた気分を振り払うために、

「あああ、ピモス！」

ピモス！

ピモス！」

と、意味もなくその言葉を呟くと奇跡が起きた。

目の前に、風に運ばれて緑色の野球帽のような帽子が飛んできたのである。

「あれ、これはっ」

「どうしたい。」

マサさん

「なくなつた帽子じゃないか」

正夫は帽子を改めて見ると、ロゴが違っていたが八割方、同じ帽子であった。

## ピモス 12

正夫の心は明るくなった。電車に乗ってから帽子を被った正夫は、全身に電流のような何かを感じていた。それは窓から照らしてくる朝日によって生じたものかもしれないし、そうでないかもしれない。だが、わかることは、その何かを感じているのは正夫であり、その何かが生じているのは正夫の肉体と精神であった。正夫はインスピレーションの赴くままに、さつき別れたばかりの市村にメールを送る。

「親愛なるミスター市村。

僕は今、電車に乗っています。あなたの見た通りだと思います。僕はさんざんいろいろなことをあなたに語ったような気がしていたのですが、これを語らなきゃ何も語っていないのと同じだと、思うのです。つまりピモスのことです。あなたもお察しの通り、僕は花見川でピモスを発見する前から漠然とピモスのことは知っていました。それは当たり前のことであって、真理というものは、常に人間をつかんでいるのです。はたしてそれを知ること感じることができるか、が問題なのです。誰にもピモスはありません。たまたま僕はこの帽子を被っていますが、あなたにもピモスはありません。いや、敢えていわせていただければ、あなたこそピモスです。この真理、わかるかな。いや、わからねえだろうなあ、なんて思ってしまったはずが、鋭敏なる頭脳、繊細なる神経を持ったあなたなら、わかるはずです。僕たちはいつもピモスについて語っていたのではなないでしょうか。あなたは空手を通して、ピモスを追求していた。僕は…何もせず、ただ生きていくということを通して、ピモスを追求してきました。僕たちはたしかにメイドバーで失敗したかもしれない。だけれども、あれはあれの方かよかったのではないか、とも思うのです。僕たちのピモスが向こうの都会に汚れたピモスに合わなかったんです。僕たちの方がより純粹なピモスです。それは間違いない。

何故なら、市村さん。あなたは僕と同じピモスを持っているから！だから僕たちは今でも会い続けているんだよ。ピモスとともに僕たちは歩んできたんだ。僕は今、この帽子（ああ、これから僕はこの帽子をピモスと呼ぼう！）このピモスを被ることによって、僕はより純度の高いピモスを太陽から浴びている。でもわかって欲しい。太陽はピモス、僕はピモス、光もピモス、何でもピモスだ。その中で僕の生命なんてものは小さいものだ。海にたとえれば波のよう。小さな波が生まれ、ピークに達して、消えてゆく。それだけの一生なのだ。しかし、僕たちは海の中にいる。海を感じることができない。その海こそピモスなのだ。ピモスは神でありすべてである。そういう意味では、神よりも尊いのであるが、ピモスは何もしない。神は何かをしてくれる。その差である。だが、ピモスは神以上である。ピモスを知ること、それは科学である。僕たちはピモスによって神を証明できる。そして、神、僕、証明、そういったものもみんなピモスの一部でしかないと忘れてはいけない。ああ、今僕はとんでもない真理を語ってしまったが、これこそ人生の本当の意味である。ピモス、こう言うだけで僕たちはわかりあえるだろう。僕たちは、ピモスの最前線に立っている。そして一番濃度の高いピモスは、今の僕の頭の上にあるんだ。これは誰も否定できない事実である」

正夫はそれから気持ちをリセットすることにした。まず自分の中で何をしたいのか、何に生きがいを感じるのかを、大学ノートに書き並べてみた。そして、彼なりの自己分析でわかったことがある。「もてたい」

非常に簡単なことなのであるが、彼の中ではその一言がものすごく大きくなっていて、生きる際の柱のようになっていた。

そこで、正夫はミクシイというパソコンのSNSサイトに入り、彼が卒業したK高校のコミュニティで

「誰かお話しませんか」

という書き込みをしたら、これにすんなり数人の女性が食いついてきたので

「じゃあ、飲み会をやりましょう」

ということになり、稲毛にある飲み屋で同窓会的な飲み会を行うことになったのであった。

正夫はその日もピモスを被ることにしていた。ピモスを被っていると、妙に元気が出てくる。これは暗示効果かもしれないが、体の芯が良い意味で揺さぶられる感じなのである。

時間通りに飲み屋に着くと、2人の綺麗な女性が入り口で待っていた。

「まさか。」

K高校の……」

2人はパツと表情が明るくなる。

「あつ、正夫さん」

「はい、そうです」

「わー、お久しぶり」

とりあえず、3人しかいなかったが、店に入り席について、いろいろ語る。その内に、4人加わって、正夫を含めて7人になった。

それぞれの人物について説明するのは面倒なので、男3人、女4人と簡単に説明しておこう。

特に印象に残った人物は2人いる。

まず、テレビの製作会社で働いている男がいて、やたら業界のことを話していたが、みな「そうなんだあ」という反応をするだけで、あとは無視という感じであった。正夫に至っては話しかけることもしなかった。

そして、やたらに正夫にボディータッチをしてくるピンク色のワンピースを着たあでやかな感じのする女性であった。正夫は、常に彼女と話していた。彼女はよく笑い、正夫のグラスの酒が少なくなると、すぐに注いでくれた。

正夫の方もだんだんその気になっていたので、彼女がトイレに行っている間に、他の女性に彼女についてきいてみた。

「あ、絵里？」

あの娘は2児の母でホステスやっているの。浮気が大好きで、さつき電話していたのも浮気をしていた男なんだけれども、別れたばかりね。

だから今はフリーだからチャンスよ。人妻だけど」

正夫は衝撃を受けた。

2児の母、既婚者が何でそんな思わせぶりなことをするのだろうか。正夫の貴重な時間を返して欲しいと思った。だが、他の女性たちには正夫はそんなに人気がなかった。多分、テレビ局の男の次くらいに人気がなかったと思う。

「うちの業界ではねえ…」

ふと見るとまたあの男はテレビ話を自慢していた。

一番いいのは、初恋の人Oに再会することであった。正夫がOの話をすると、Oの友人という人がいて、最近の彼女の写真を持っているというので見せてもらったのである。

それにも衝撃であった。彼女は高校時代に、ふくよかदैいて、それでいて太っていない魅力があったが、時間は冷酷なもので、どん

どん太って大福餅のように膨らんでしまった。肌がピンク色なので  
苺大福を連想する。正夫の美しい記憶は粉々に砕けてしまい、傷心  
の正夫は、もうこうなったら目の前にいる絵里に手を出そうと決意  
した。

「ピモスよ！」

俺を見守っててくれ！」

さすがに店内では帽子を脱いでいたが、帽子を持つ手に力が籠っ  
た。

## ピモス 14

それから会が開けて店を出るときになって正夫はピモスを被る。  
すると絵里が寄ってきた。

「あたし、酔っちゃったのかなあ。」

本当は、こんなんじゃない女なのにどうしてだろう」

という絵里は、正夫の目を見つめる。

「いや、それは、ほら」

ドキマギして正夫は目をそらす。

「そらしちゃいや」

という絵里は正夫の腕をつかむ。胸が触れる。どうしてこのようなことになるのだろうか。正夫はそれほど女性と会っていなかった。こので、こういうこともあるんだよ、ということがわからなかったのか、それともピモスのせい、たんなる運か。

「ああ、ピモス！」

正夫は呟いた。

「えっ、何」

「何でもない。」

ただね、俺、こういう状況になると、すぐに哲学的なことを考えなくなるんだよね。何故だかわからないけど。

俺はどうして生まれたのかとか、俺にとって生きがい何かとか」

「ふうん。」

変っているなあ。

あたしはね、こういうときは、何考えるかなあ。

そもそも、こういうときってどういうとき？」

絵里は正夫に絡まりつく、周りの人間は、この2人は放っておきましよう、ととっと別れてしまった。2人きりになって駅前でグダグダしているのも何なので、近くのマクドナルドに行くことにし

た。

「あたしはね。

高校時代に、正夫君と会って何回か話しているなあ。

覚えている」

「いや、それがまったく覚えていないんだ」

「たしか、英語の先生が厳しいという話をして盛り上がったんだよ」

「そうなんだ。

じゃあ、そうなんだろうねえ」

「覚えていないの。

もう、いけずうだなあ。

正夫君はっ」

といい、彼女の顔が近づいてくる。甘い息がかかってくる。これは落としかかかっているのではないだろうか。もしそうだとしたら素直に落ちようと思った。

「俺、君のことは覚えていない。

けれども、俺と君との間に、思い出はいらないよ。

何故かわかるかい」

「えゝ何で」

「思い出は、これから2人で作ればいいからさ」

しばらく絵里は正夫を見ていたが急に笑う。

「プツ。

何それ」

「いや、だからさ。

口説いているんだよ」

「面白いなあ。

正夫君は」

というと、絵里は脚を組んで煙草を吸った。

「あ、煙草いい？」

「うん。」

それにしてももう朝方だねえ」

「そうだねえ。」

何やってるんだろうねえ。

あたしたち」

というと、絵里は窓を見て頬を赤らめて少し笑った。この女性が  
どいう女性かは知らないが、底知れぬものをもっていることは確  
かであるが、それでも今、彼女はすごく魅力的に見えた。Oとはま  
ったく違う女性で、ピンク色がどこか少女の雰囲気を出しており、  
それでいて茶色い髪は完璧に30女なのであるが、瞳は純粹なのだ。  
少女の雰囲気をつまく使って、男を引き寄せる30女の成熟した魅  
力であった。

「ねえ、今度、映画に行こうねえ。」

ホラー映画が好きだといっていたねえ」

「ええ。」

行きましょう。

じゃあ、今日はお別れね。

ちよつと寂しいなあ」

「朝のジョギングでもする」

と正夫は冗談をいうと

「無理無理！」

あたし運動とか大っ嫌いだから」

「実は俺もなんだよ」

と2人は笑って、マクドナルドから出て絵里はタクシーに乗り、  
正夫は電車に乗って帰ったのであった。太陽はまだ出ていなかった  
が、空の片隅が淡く光っていた。

それから数日後、例の帽子を被った正夫は得意そうに市村に絵里のことを話していたが、市村の表情は曇っていた。そして、もつと表情を曇らせていたのが、久々に会う美園であった。

彼は、前に会ったときよりも、二周りくらい太っており、常に刻まれている深い眉間の皺のせいで、ふくよかな顔なのに愛嬌もなく、どこか砕けたガラスのような、そんな不機嫌そうな表情をいつもしていたが、今回は、正夫の何だかわからない話をきいて、さらに不機嫌になったみたいである。甲高い声で質問してきた。

「それでさ。正夫君。」

君はどうするつもりなの。

だって不倫だよ、不倫は良くないよ」

と、少しニヤニヤ笑いながらアイスコーヒーを飲む。

場所は中野のファミレスであった。市村と美園は会うと常に空手や格闘技の話をして、正夫は置いてけぼりになるのであるが、正夫はここぞとばかりに自慢したのだった。携帯にちゃんと画像もとつてある。ノリノリの彼女が胸元を少し広げて映っていた。

「はつきりいつてね。」

僕は、その帽子がどうか、そんなおとぎ話みたいなのは信じないよ。向うは寂しかったかして、何でも良かったのかなあ、とは思うね。失礼かもしれないけれどもさ。

あつ、でも改めて見ると綺麗だねえ。

正夫君！うらやましねえ」

というと、美園は正夫の腕をつかんできた。

「やめてください。」

やめてください」

といいながら、正夫は携帯をしまう。

「そうか。」

正夫君は、僕を独りぼつちにして、一人だけこんな可愛い子と、いちゃいちゃするつもりか。はつきりいって、僕は悲しいよ」

というアイスコーヒーストローでチューチュー吸った。

「奥さんというのが俺は何だか嫌だなあ。

ややこしいことにならなければいいけれども」

と市村も同じような意見であった。

「二人とも違うんですよ。

俺がいたいのはそういうことじゃないんですよ」

普段、正夫はこの二人には従順であったが、この日、ついに意見したのであった。

「この帽子、これが無限の可能性を秘めていると、それを指摘したかったんですよ。この女性はおまけみたいなものなんですな。

今まで、うだつがあがらなかった分、これから俺はこの帽子によってどんだんツキを呼び込んで成功者になってゆくと思いますよ」  
「そんなことってないと思うよ。」

正夫君。

はつきりいって、僕はね」

美園はアイスコーヒーストローを飲みつくす。

「そういう空想話は、ありえないという立場なんだよ。

だって、前に僕がUFOとかに凝っていたときも何の良きこともなかったからねえ。あれはお金を食うばかりだったよ。

もうオカルトはこりこりだね。ちゃんと高いカメラとか買ってね、UFOを撮ろうとしたりとかしたんだよ。でも、何も出てこなかったからね。騙されたって思ったよ。」

そもそもそのピモスってというのは何なの。どこから思いついたの」

「それが自分でもわからないんですね」

「はつきりいって、そんなことあるわけがないよ。夢を壊すように悪いけれどもね」

「俺もそう思ったこともあるんですが、どうも本当なんですよ。こ

の帽子に関しては本当なんです。とにかく今後、俺にはもっといいことがありますよ」

「そうかい。」

「じゃあ、ソープでも奢ってもらおうかなあ」

「という和美園は正夫にヘッドロックした。」

「はい、美園さん。」

「はい、ギブギブ！」

「今日は許さないよ。」

「白状するまで離さないぞ」

「何をですか」

「合成写真だろう」

「本物ですよ、本物！」

「ネットで拾ってきたな」

「そんなことしない、しない」

美園のお遊びがあまりにもしつこいので、市村も間に入って引き離した。

「はいはい。」

「落ち着いて。」

「美園さん、今日はテンションおかしいわ」

「それはそうだよ。」

「僕の仲間だと思っていた正夫君がこんなにもてちゃうんだもの」

「あつ、メールだあ」

メールを見ると、絵里からの熱いメッセージが送信されてきていた。

「うわああ」

「その文章を読んで、美園はさらに顔をしかめる。」

「もうね、これは正夫君に奢ってもらうしかないね。」

「今度会ったときには頼むよ」

「というとお腹の肉をつまもつとしてきた。」

「ああ、もう面倒な人だなあ」

正夫は笑いながら身をかわす。

「とにかく今、俺は絶好調なんですよ。

ひゃっほう！」

と、ガッツポーズをとる正夫に、いつもの暗さはみじんもなかった。

「まあ、明るいつてことはいいいことだけれどもねえ」

市村は少し呆れているようであった。

それから数日後、ラブホテルのベッドで、横になりながら正夫は帽子をいじっていた。隣にはもちろん絵里がいる。彼女はより一層あでやかになっっているように感じたが、良く見るとそれ相応に歳をとつてもいた。頬の下の辺りに少し皺があった。しかし、そういったものを茶色い髪、顔の綺麗な造作が完璧に隠しており、すぐに彼女は明るい表情をして、少女らしい雰囲気醸し出すのであった。

「それにしても、まったく相手にしてくれなかったよ。」

市村さんも、美園さんも

「それはそうでしょうねえ。」

あたしもそうとは思えないもの」

「そんなことないって。」

「そうなの。」

そりゃ帽子は似合うと思うけれども、それだけよ。

帽子がどうだってことはないと思うよ」

絵里は、ベッドの上でしゃがんで煙草を吸った。

「本当なのになあ。」

まあ、それも今日中にわかるさ」

丁度、窓の外を見ると、夜が明けそうになっていた。

「どういふこと」

「実は、俺の貯金を全額はたいて宝くじを買ったんだよ。その当選日が今日なのさ」

「また、思い切ったことしたねえ」

「俺のツキが本物、つまりピモスが本物だとしたら、一等は確実にだからね」

「うーん、どうなんだろうかねえ。」

まあ、どっちにしても興味あるわ。

「正夫さんって、宝くじが当たったらどうするの」  
「決めているんだ。」

小さな家を買って、銀行に預金してそれを取り崩して生きてゆく  
ってね。地味に生きてゆくよ。それだけだよ」

「何か夢がないなあ」

「夢がなくても、今、俺の考えていることはそれくらいだもの。俺  
は昔からそんな人間なんだよ」

「豪遊すればいいのに」

「豪遊なんて知らないよ。今さらどうやっていいかわからない。新  
しいゲームは買うかもしれないけれどもね」

「ゲームなんてダメ！」

しみつたれているなあ」

「いいんだよ。俺はしみつたれているんだ。もうバブルみたいな夢  
を見たくないね。本当に馬鹿らしい。地味に生きる。これは俺のモ  
ットーなんだな」

「そうかあ。」

まあ、そもそもが当たって決まったわけじゃないものねえ」

「そこなんだよ。」

ああ。楽しみだなあ」

「それにこの時代、1億仮にもらえたとしても、そんなものかなあ。  
夢のない時代だもの」

「そうだねえ。」

宝くじで巨額の富を得た人は、大体、浪費して不幸になるって話  
をきいたことがあるけれどもね」

「でも、楽しんだからいいじゃない。とも思えるし」

「まったくその通りだね。」

ああ、むしろ俺は夢が欲しいな。

何を考えても、あやふやで形にならないんだよ」

というと、正夫は絵里を抱きしめた。

「こんなことくらいしかできない。」

それが俺なのさ」

「そんなことないよ。もっと夢を見ましよう。正夫さんが夢を見れるように協力するから」

絵里は、帽子をつかむ。そして、台の上に置き、正夫の髪をぐしやぐしやにした。そして何回も接吻をする。

「やってやる！」

「やってやるぞっ」

何に對してかはよくわからないが正夫は意味もなくこう呟いたのだった。

新聞に載っている宝くじの結果を見るために、正夫はホテルから出て自宅に帰る。そして、自分の部屋の机の中にあるたくさんの宝くじを机の上に並べて、一枚一枚、真剣に結果を照合する。

正夫の心臓は高鳴っていた。この流れは、大金持ちになる流れである。自分でもわかっているのだ。ピモスがどうにかしてくれるはずである。そう思いながら、宝くじを見ていると、笑いがこみあげてきた。

しかし、100枚調べてみて驚いたことに一枚も当たっていないかった。これはもちろん、ありえないことである。正夫は、首を振り肩をすくめてみせて

「おいおい。

ピモス、冗談だろ」

というポーズをして、また調べた。

いくら何でも一枚くらい当たっていてもいいじゃないか。これほど調べてストレートにない、ということは全知全能の神、の上にいるピモスが、自分を驚かせようとしているに違いないと思って、鼻歌でも歌うような気楽な気分であくじをめくる。

しかし、ない。

1枚も当たっていない。

正夫は愕然とした。ピモスはどういうつもりなのであろうか。ここまできて、何で大いなるピモスの力が発動しないのだろうか。せっかく帽子まで被っているのに、非常におかしな話である。

おかしな話であるが、もう一回調べてもなかった。

かすりもしなかった。

これは悪夢ではないかと正夫は思った。ピモスは何てことをしてくれたのだろうか。ここにきて何で裏切るのだろうか。ピモス、まさか、1億円当てるのに、1億円宝くじを買わなきゃいけない、と

かそんなモットーをもっているのだろうか。

正夫の中で何かが折れた。今までピモスだけを信じて生きてきた正夫に、ピモスが微笑みかけたと思ったら、こんなところで見捨てられた。目の前が真っ暗になり、耳鳴りがして音がきこえなくなつて、そのかわり、

「ピモス。」

ピモス。

ピモス」

という声がじわじわと頭の奥の方から沁み込んでくる。

このピモスは何ものなのであろうか。ひよつとしたら何ものでもないものなのであろうか。ピモスが部屋の中にたくさん反響して、その音につぶされそうになる。

「あつ、助けて。」

助けてくれええ」

正夫は部屋の中で絶叫した。

「ピモスに襲われる。」

何かいろんなものが攻めてくる。

俺は天才じゃない。

俺は天才じゃないんだ」

と必死にテレパシーを送っても、返ってくるのは

「ピモス。」

ピモス。

ピモス」

という声だか音だかわからないものであった。

大海の中にいてたくさんのピモスが群れをなして泳いでくるかのように、ピモスの洪水の中に身をさらしている内に、正夫は何かピモスで、何が自分なのかが不明瞭になった。今、正夫は布団の上に横になっているのであるが、同時に宇宙に漂っていた。

右手の上には、小さな市村が空手の道着を着て、正拳つきをしていた。それと同時に、ある角度から見ると、若いころのダスティン・ホフマンに似ていた市村は、ひび割れたグラスの破片を突きつけてくる。それが拳になったり、グラスになったり目まぐるしく変わっている。

左手の上には、小さな絵里がピンク色の服を着て、松浦亜弥のモノマネをしていた。オーバーなアクションをして、後ろ向きになってポーズをとって、こつちを振り向いてウインクした。

腹の上には、小さな美園が回しをつけて土俵入りをしていた。妙に爽やかな顔をして、まるで天職を見つけたかのようにであった。全身が汗でギトギトに輝いている。

左足には、リサイクル店の小さな沢渡茂男が、眼鏡をつけて「イマジン」を歌っていた。彼が歌うと暇人と歌っているようにしか聞こえないが、それでも切迫した彼の平和を願う心を感じ取ることができた。

右足には、テレビ局に勤めている男がメガホンを取って何かを叫んでいた。多分、「テレビ、テレビ、テレビ」と叫んでいたのであらう。

こうやって、正夫の五体の上でいるいろいろな人たちが渦となってクルクル回っていた。それを正夫は他人のように眺めていた。遠くでまるで、現実のことではないかのようにであった。もちろん、それは現実のことではなかった。だから、正しく認識できているのであるが、あるはずのないものが、あることは確かであった。これが消え

ないものだろうかと思つていると、消えそうでなかなか消えなかった。この5人がそれぞれ正夫の命を狙つているかのようにであつた。目を少しでも閉じたら殺されると思つた。

人生とはそんなものであつた。と、ふと正夫は思つたが、人生とは何であるうか、正夫はさっぱりわからなかつた。多分、この5人もわからないに決まつている。正夫は彼らの下にいながら、彼らを支配していたのであろうか。そんなことはなかつた。彼らは自由であつた。正夫も自由であつた。

自由に殺される。正夫の頭にふとそんな恐怖が芽生えた。自由とはピモスである。だが、本来ならば安心して良いのだ。人間はピモスから生まれ、ピモスに帰るのだから。完璧な自由とはもちろん死のことであらう。それは虚無でもあつた。

正夫は何とかして部屋の中にいる自分を動かして、周囲の人間に助けを求めないとこれから何が起るか、わからなかつた。部屋の襖がどんどん美園の押しつぶしたような苦い表情の顔になつていくような気がした。その面積がどんどん広がってゆく。しまいには襖だか顔だかわからなくなつてきた。美園だか誰だかわからなくなつた。下手をしたらそれは正夫の顔だつたかもしれない。

急に顔を布で覆われたように視界が真っ暗になって、どうしたのかと思っても辺りは漆黒の闇の中になってしまった。それでもしようがないので、じっとしているわけにもいかずに、ただただ歩いていると、気がつけば自分の足元にはぼんやりと光る白い道があった。それは道というよりも橋だったかもしれない。5メートルくらいの幅で、両端に欄干がないので足を滑らせでもしたら真逆さまである。道は蛇のようにグネグネと曲がって虚空の中に消えていた。そんな中を正夫は歩いてきた。正夫は部屋の中にいたはずなのであるが、いつのまにかそのような記憶は消し飛んでいた。

これまでずっと何百年も歩いてきたような気がする。辺りは白い道と闇しかない。白黒映画のようであった。遠くの虚空に白いチューリップのようなものが浮かんでいた。何だろつかと歩いてゆくと、それは舞台になっていた。花びらがちゃんと舞台を見えるように開いているのであった。真っ白な床の上に直立し、黒い燕尾服を着て、ちよび髭を生やした中年男が胸を手に当てて歌っていた。

ピモスのことをいつも考えている

その美しさが頭を離れない

どんな小さくならぬことでも

心に残ってしまう

ピモスのことなら

ピモスのことをいつも考えている

昼だというのに夢の中のように

王様のようにハッピーな気分

何故ならばピモス

君のおかげなのさ

ああピモス  
僕は君が欲しい

ああピモス  
君はどうなのかい

ああピモス  
こつちを向いてくれ

ピモスのことをいつも考えている  
昼だというのに夢の中のよう

正夫は歩きながらその歌手に嫉妬した。本当は正夫が歌いたかった。そしてピモスを讃えたかった。誰も拍手してくれなくとも、正夫はただピモスを歌いたかっただけなのだ。しょうがないので、正夫は拍手をしながら歩く。中年男は礼をしてアンコールと思ったのかまた歌ったのであった。

正夫は、この歌手の歌こそ真実であり、この歌こそ真実であり、この声こそ真実であり、それを聴いているこの耳こそ真実だと確信した。この歌に関しては、一語一句すべての瞬間を完璧にいつでも思い出せるように記憶しておくか、そうでなければまったく忘れてしまうか、どつちかにした方が良く強く感じた。

正夫は頭の中でできるだけ完璧に歌を繰り返し返す。すると、世界の中心にいて、世界の核心を抱きしめているようなそんな感じになった。何て素晴らしい瞬間なんだろうと涙が出てきた。正夫は帽子を脱いで挨拶をする。

「ピモスに栄光あれ」

と叫ぶと、正夫は巨大なチューリップ式舞台の横を通り過ぎて、また新たなチューリップの舞台の前に行くのであった。良く見ると、

チューリップはいくつもいくつもあつた。正夫は、これは地獄めぐりかもしれない、と思った。

正夫は何ものかに引き寄せられるようにして歩みを進めていた。それは戻ることができないからしかたなくということもあった。白い道はどこまでも視界の端まで伸びていた。途中で、チューリップ型の舞台があつて、そこでいろいろな人がいろいろなことをしていた。それを見物するのが楽しみであつた。

市村が、フランスパンを手にとってフェンシングのように前に突き出していた。美園が、コーヒー牛乳の紙パックをいくつもいくつもガブ飲みしていた。絵里が、意味もなく腕立て伏せをやっていた。沢渡茂男が、かつらを被り、長髪のジョン・レノンの扮装をして、海援隊の「贈る言葉」を歌っていた。

そのどれもが正夫にとつては面白く、そのどれもが宝物にも感じられた。そして、とうとう白い道は、チューリップ型の舞台を終着点にして、消えてしまったのである。

そこは、白い床、白いテーブル、白いベッドがあり、天使のような女性が正夫を待っていた。正夫がその部屋に入ると、女性は、甲斐甲斐しく正夫の面倒をみてくれた。正夫は何か話そうかと思つたが、言葉にならなかつた。

その女性はとても綺麗であつた。彼女と比べたら、絵里は都会の汚辱にまみれている感じがした。その女性は無菌室で育つたような楚々とした雰囲気があつた。正夫は、ベッドでポケつとしていたが、急にしびんを取り出して

「ここになさいますか」  
ときいてきた。

正夫は言葉を口から出そうとしたが、それは言葉にならないので首を降り、自分でトイレに行つて用を足した。どうして、ここまでしてくれるのであろうか。ぼんやり考えたがわからなかつた。

ふと、部屋を見ると、例の白い道も虚空も消えていて、窓から外

は、普通の晴れた空と駐車場が広がっていた。正夫は、テレビをつける、テレビは頭が混濁してくる雑音を発するので、怖くなくなって消した。

ときおり、市村がやってきて正夫に果物をくれたりした。正夫は、果物を食べて、涙が出るほどおいしかったが、それにお礼をいうこともできなかった。市村はしばらく部屋にいたが、手持ち無沙汰になって帰った。

あとは、正夫の生活は、白い服を着た女性との共同生活になったが、その女性には生活感がなかった。どこで寝ているのかもわからない。正夫は二回くらいベッドに誘ったが、彼女は首を横に振った。しかし、それはそれでよかったのかもしれない。

正夫は話すことができなくなり、性欲も減退していた。彼女をベッドに誘ったのは、儀礼としてであった。もし、仮に彼女が誘いに乗ったとしたらどうしたであろう。それは抱き枕くらいにはなつたであろう。正夫は、抱き枕が欲しかったのである。それは、市村にメモに書いて教えるとすぐに買ってきてくれた。

後はもう、特に何も問題もなかった。この白い場所で、ずっと日々を過ごしてゆくだけで良かった。性欲のなさ、正夫に無駄なことを考えさせなかった。というよりも考える能力がいちじるしく低下していた。だから幸せとか不幸とかわからなかった。そもそも少ない思考能力で、考えてみるに、正夫はそんなに幸せとか不幸にこだわらな人間でもなかった。

ある日、ここは天国であり、あの女性は天使なのではないかと思つた。それは強烈だったので、どうやらピモスが自分に確信を抱かせようとしているようなので、自分が知っているよ、ということとを彼女に対して意思表示しようと思死になって話したのであった。

「あの…その…ここは、天国ですよね」

正夫は、何度も何度も挫折してようやくその言葉をひねり出した。その女性はベッドのシーツを整えていたが、こちらを振り向いて、天使のような笑みを浮かべると、返事をしてくれた。

「いいえ、病院です」

あれから半年後、正夫は、退院して日常生活を普通に営んでいた。意外にも正夫はそんなに悩むこともなく社会に溶け込み、社会の方もそんなに正夫を邪険にするようなこともなかったが、しかし、それは最低限の生活であり、言い換えるなら、ワーキングプアであった。

とはいえ、正夫には絵里がいた。彼女としょっちゅう会っていて、正夫は二人との房事の質をさらに濃密に深くしていった。まるで芸術のように、様々なアイデアが浮かび、正夫は彼女に実践した。彼女はそれに喜びをもってして、耐えた。正夫のアパートの部屋は、まさにいつでも春であった。赤い花瓶に薔薇の花が差してあったが、それはまさに狂気の象徴であった。

今日も正夫は、彼女を待っている。頭の中でどうしてやるうかと思索して、まるで彫刻師が彫刻を掘るように、二人の姿を想像していた。

ドアが開いて絵里がやってきた。彼女は休日はジャージであった。あでやかな顔をしている。彼女は誰にでも好かれる女性であった。体にピンク色のオーラを発散していた。

「まずは腹ごしらえだな」

というと、二人のための昼食を正夫が作った。正夫はここ半年で、何故か料理のスキルがグングン上がっていた。テレビの料理番組を良く見るようになったからであろうか。今や、正夫にとってテレビとは料理番組のことを意味するまでになっていた。

さつさと料理はできて、二人は黙々と食べる。正夫の中にエネルギーがふつつつと煮えくり返っているのが自覚される。炎のような何ものかが、正夫の腰の辺りをジンジンさせている。

目の前の彼女はご飯を食べる姿が楚々としていた。あつという間に食べ終えた正夫は、満腹の状態で、まだものを食べている彼女を

見ると、食欲とはまた別の充足感があった。

彼女には二人の子供がいた。彼女は本当にどうしようもない母親で、結婚していながら不倫をし放題であった。二人の子供も小学校に通っているので、午後四時くらいまでに家に帰ればいいのである。スナックの仕事は週三でやっていた。他の日は大体、遊んでいたが、今や、ほぼ正夫の家に行った。

正夫は彼女を見つめていた。ようやくご飯を食べ終わると、絵里は微笑んだ。

「そろそろ、かしらね」

「ああ、いつでも準備はできているぜ」

という正夫はベッドに突進した。

後ろから

「インディアンになった気分。」

ひゃっほおおおい」

という彼女が飛び込んできて、正夫を抱きしめた。

そのぬくもりの中に、正夫は沈みこみ、彼女の体温を感じ、彼女のコアな生物としての核のようなものを感じた。正夫は、ゆっくりと彼女をベッドまで誘導して、じわじわと彼女の肉体を露出させてゆく。もちろん、丁寧な愛撫を重ねながらであり、すべてを脱がすと、正夫は、二人の感覚がどこまで高まるかに挑戦することにした。そのときがくるまで決して、愛撫をやめないでおこう。と思い、いつまでもいつまでも彼女の肉体に、心地よい刺激をゆったりそしてねっとりを与え続け、そして自分も彼女から返礼を受け続けた。

そして目覚めると彼女はまるで妖精のように羽根が生えたか翼が生えたかわからないが姿を消しており、正夫はベッドの上で残された煙草を見つめていたが、煙草は吸えなかった。

粘りつく暑さをそのままにして自分を疎外して何もせず昼も夜も過ごすことができたならどれほどいいことか。でも、肉体はいつでもまとわりついてくるのでこの限られた魂に、苦悩を一心に集めている。ように思えるのであるが、本当はそんなことはなく、ただだからと生きている。と自省するのであるが、では、ダラダラの逆は何だろうか。背筋をピシツとして生きることなのであるが、自分にはなかなかそれができない。いつも脱力、でも、それは脱力を超えて、弛緩というやつであろう。

まるでバナナの皮のようによくにやりとベッドの上へたばっている。室内は一言でいえば乱雑になっていて、すぐ窓の外にはランタナの花が咲いていたらしいが、それは幻かもしれない。

ああ、生きるって何だろう。ああ、生きるって何だろう。と天井に向かって呟くが、本当はそんなに生きる意味なんてものがわかってても困るものであり、呟きたい、そんなポーズをとりただけであった。存外に俺個人の生きる意味なんて大したものではないかもしれない、そうなる。と今まで自分は何だったのかということになりそうだから。

でも、何だっつていいのだ。反省しても時間は戻らない。この世は一瞬前から出来上がっているという宗教があるみたいであるが、まさに、そんな感覚で生きるしかあるまい。いや、生きなくてもいいのだ。生きないつもりで、生きることだってできる。むしろ、そんなつもりで生きた方が抑えが利くのかも、と思っただけ、何に對する抑えなのであるのか。と自問したがそれこそまさに生きる、ということへ、そっちの方向への抑えなのである。

エネルギーということといえば、ぶわっと生じ、そのままどうしようもなく高揚するものであるがそこをうまく抑え、抑えた上で、それをうまく通して、ゆったりと着陸させる…何かこう書くと哲学

つぱく聞こえるが、ハードロックの昔懐かしいホワイトスネイクの「ダウン スロウ イージー」と同じである。

そして話は抽象から具体へとレベルが下降してゆくのであるが、さしあたっては、この三日間どうするか、ということが、私の中のテーマであり、実は、私の持ち金は、2100円であり、いかに少ない出費で空いている時間を過ごすかしかも楽しく独りであるということを考えてみたい。こういうことを志向することそれ自体が資本主義への重大なる反逆なのであるが、それは貧乏という寂しい外套によって隠蔽されていた。

一見、こういう侘しい心配事が、実は体制側への反逆であるということはありえそうである、換言すればそれは希望でもあった。だが、話の主題はそんなところにはなく、私はこれからどうすればいいのかであり、本当は女と会うということをするればいいのであるが、都合がつかないので、やはり独りで生きなくてはいけない。

とりあえずは、本でも読もうか、ということになる。その関連で思い出したが、昨日の図書館のことである。私の通っているその図書館は狭くて本棚に本がぎっしり詰まっている割りにはマニアックな作家の全集本が置いてあったりするアンバランスぶりなのであるがそれはいいとして、私が文庫本のコーナーで学術系の本を探していると、その棚の脇にある椅子に肌の綺麗な女子高生が座って一心に本を読んでおり、そんな姿に微笑ましさを感じるのであるが、そのすぐ隣に、麦藁帽を手にした疲れたようなおしゃれな奥さんが座って、スカートを少しめくって自分の足を搔いていた。

萌えた。と、それだけのことなのであるが、私はその勢いで思わず料理の本を選びそうになった。世界美食巡り。という体のその本を私はしばらく読んでそんなに内容が自分に関係なさそうなので戻した。他にも昭和40年くらいの手料理の本だとか、でもそれは面倒そうなので、自分の料理の参考にはならないだろう。

「あのさ。正夫じゃなかったの。いつの間にか私になっているけど」

と市村さんが正夫に電話してきたので、正夫は

「ええ、正夫ですよ」

と答えた。

「さつきさ、私になっていたよね」

「いや、そんなことはないですよ」

と正夫は否定した。

「なっていたよ、私に」

「気のせいですよ」

「そうか。」

まあ、いいけどさ。

それにしても、元気かい」

「元気というほどでもないですけどね」

正夫はその関連で、昼勤の奥さんに、正夫さんはいつも元気そう  
でいいですね。といわれたことがあり、それに対して、そうでもな  
いですよ。あつ、でもそうかもしれないなあ。と答えたことを思い  
出した。

「いや、元気だよ」

「そうかもしれないですね。いろいろあるんですがね。俺の体にも。  
まあ、でも病気ではないですからね。未病ってやつですか」

未病というのがどんな意味かわからないが、使ってみた。向こう  
もわからないらしくこの言葉はあっさりスルーされた。

「そういえば、最近、俺、青汁飲んでるんだよ。」

野菜ジュース相変わらず飲んでるの」

「あつ」

確かそんなことを話していたんだつた。正夫は前に誰かに野菜は

大切だよ、と説教したこともある。しかし、最近、というかその説教して一カ月後くらいから野菜なんてどうでもいいや、という風な食生活をしていたが、別に体にそんなに異常はなかった。

「そういえば、それで思い出したんですがね。」

市村さん。

ものを食べたつもりになることによって、本当にそのものを食べたような効果になることってあるみたいなんですよ」

「えっそうなの」

「何かそんな本があったなあ。プラシーボ効果じゃないけど。」

あとトレーニングも自分の中でイメージするだけで筋力が上がる  
とか」

「へええ」

「だから俺も、もうそれでいこうかと思えますので」

「はあ」

「妄想上で、豪華なものを食べますわ」

「そうか。」

それでいいなら、そうしたら。

俺は、正夫つてのが私つてなっているので、気になったから電話  
しただけだからさ。

「そんじゃね」

「はい」

と、いうと正夫は電話を切った。市村さんのいっていることはよくわからなかったが、多分、何かになっていることであろう。それは否定しない。

ふと妄想上で女と戯れるという概念が正夫の頭を急襲する。正夫は最近だと壇れいという女優が好きであったが、どうしてかという、日本美人的な昔からの女性のよさみたいなのを感じるからである。壇という苗字もいいし、れいという平仮名の名前もいい。壇ふみという女優さんがいたが、親戚なのであろうか。壇一雄の娘で、父は小説家で「火宅の人」という小説がブームになったので、正夫も読んだことがある。

そういう意味では、小雪という女優も良かった。そういえばいつも思い出すのであるが、「オールウェイズ 三丁目の夕日」という映画を見ていなかった。いつも見よう、見ようと思っているのが忘れてしまうのである。

正夫の女性の好みはとも、見ようによつては怖い感じのする女性に偏りがちであった。たとえば、前述した二人は、日本風な美人なのであるが、それは影の中においておくと、容易に幽霊を連想できる。

いや、そもそもが美人というものが怖いものではなからうか。あれほど意味もなく容姿が整っているということ自体が怖い。どこか歪んでいる方が安心できる。とはいえ、怖さと裏腹に官能美もある。

正夫はどこかでこういつた女にいたぶられたいという気持ちもあった。多分、直接、いきなり殴られたら反発するのであろうが、向こうが何かブーブーいうのを、まあまあなんていつて宥める。

「もう、正夫さんっていつもそうなんだからなあ」

とか。

「つまらないなあ」

とか。

もちろん、正夫はつまらない人間である。ここまでこの小説を読

んでくれた読者ならつまらないの意味はわかるであろう。ちなみにこの小説は、10点満点評価で、3点という評価をつけられている。もちろん、そんな評価つけるやつが小説を書いているとして、その小説がこの小説よりも面白いことは絶対にならないだろうが、それでもどこか腹が立つのだ。でも、仮にそれが女だったらどうだろうか。

それはありだ。

だが、それなら直接にガンガン接してきて欲しい。というよりも、あんまり正夫の小説に鑑賞して欲しくはない。もうこの小説は好き勝手なことを思いついたままにたどりなおすこともなく書いているだけであるから。

行き着くとそうなるのだろう。もう、正夫の小説なんて目の目を浴びることがないのだ。いっそ、正夫というのもやめよう。私にしてしまった方が楽だ。私は、そのホステスみたいな女性と会いたかったが会えないというのは前に書いた。そして、三日間どう過ごすか、これが喫緊の問題なのである。

さつき市村さんと電話したが、その関連で思い出したのは、身体性の問題である。つい最近まで私は、甲野善紀という人の本を読んでいた、この本のいうところに感銘を受けていた。体は、発想を新たに、動かしてゆけば、どんどん新しい動き方を発明できるものである。というような意見であり、甲野さんは訓練は無意味だ、というようなことも仰られていた。

まさに文学もそうで、訓練糞食らえ、というよりも文学評価、糞食らえである。特にあの3点野郎には、私はいつておかなくてはいけない。お前の文学概念なんぞ、浅いんだボケ！

お前が女だったら俺はこういな。

お前のキスした男の経験よりもさらにいいものを俺は経験させることができるぜ…

あっ、やばい。何か啖呵を切ろうとして、グダグダになってしまった。今、急に感情を爆発させたが、多分、3点野郎もいいやつに

決まっている。こんなどうでもいい小説を読むという段階で善人だし、下手をしたらすごく深い人間なのかもしれない。私は勝手に怒ってしまったが、もうそういう性格はやめよう。

私は仏になりたいのだ。

しかし、そんなことはどうでもいい。  
話を壇れいの方に戻そう。

壇れいという女性を私は本当に彼女として見ているのかどうなのかはわからない。私の中では二十年前の壇ふみとして見ている可能性もある。今、調べたら二人は全然関係がないみたいであるが、壇れいという名前をつけた段階で、多分、作威的なものがあつたのだろう。といわざるをえないほど、そっくりなのである。

しかも性格も似ているのではないか。つまり、一見、おしとやかに見えてすごく強気。となると、壇れいは、どうなるのだろうか。多分、離婚するのではないだろうか。という危惧もある。だが、結婚する相手が及川光博であるから、俺は思うに及川は多分ホモで偽装結婚なのかもしれない。そして壇れいは、レズなのだ。こういう美男美女ってのはえてして、そういう風になりやすい。

どうしてかというと、自分が好きであり、他者を好きになるという脳の動き方ができないからではないか？だから、どこか自分の影のある存在をトレースして、面影のある人間を好きになるのである。

私が思うに、これはもちろん想像だが、壇れいは、昔の壇ふみを見たら惚れるだろう。ひよっとしたら今の壇ふみとも関係があるかもしれない。もちろん、そういう空想を試みるのはすごく楽しいことだ。

たとえば、話は変わるが、小林麻耶の姉妹が昔、一緒に風呂に入っていたと雑誌で語っていたが、ああいうのを空想するのと同じくらいな楽しみであり、実際はどうってことはないであろうが、いや、それでもやけにワクワクする。

もっというと、窪塚洋介が、叶姉妹のホテルに15連泊というニュースが昔あつたが、あれを妄想するのも楽しい。ファンっていう

のはそういう邪な妄想をするのが楽しいからファンになっているという部分もあるんだと思う。

しかし、本当に壇れいのことを信じているファンはそうでないかもしれない。彼女が清纯派（笑うちまうぜ！）で、あの金麦のCMみたいに、どこかの草原でいつも着物着て笑っているだけで、男のチンチンなんかには興味がないほうがいい。みたいな…。

でも、俺のレズ説でいえばそれは合っているからいいのか。いや、清纯なレズなんて嫌だな。ってか清纯って最近、思うんだが、何だかわからないけど綺麗な存在にしておく、って意味でしょ、もはや個性のない女を、どこに放り込もうか、いいや清纯派で。って感じでしょ。だから女優で清纯派なんて、そんなに名誉なことじゃないと思う。

壇れいの将来は、多分、すっげえ強気な性格かレズで離婚ってことになると思うけど、現実ってそんなものだな。とここに断定させてもらおう。でも、ホモとレズ、この二人が、お互いに訓練して何年もかけて、一見ノーマル的な、それでもアブノーマルな仲になるのもいいかもな。

ってか、ある年度を越えると関係性なんてみんなアブノーマルになるわけじゃん。俺が長い間付き合っている人間とやけにしっくりいくのは、俺がアブノーマルだからなわけでしょ。

だから意外とこの二人も、アブノーマル婚ということで、長続きする可能性はあるな。

まあ、そんなことも、俺にはどうでもいいことだけだ。

いろいろあつて私は五百円硬貨を手に使っている。今日はこれだけだ。長い長い人生の中で自分のこの一日、使えるお金は五百円。さあ、どうする。いや、預金があるから落とせばいいけど、でも、それをやったら負けだ。戦う、何に対して戦うかはわからない。いや、わかっている？

ピモスだ。

今まで諦めてきた。逃げてきた。いろいろ言い訳を考えていた。そうして自分を甘やかせて生きてきた。でも、そんな人生楽しいだろうか。もっと違う、強さを求めなくてはいけないんじゃないか。このままで、いいのか。

という思いを五百円に込めて、俺は歩く。スーパーへの道を。歩きながら、俺は口ずさんでいた。俺の一番好きな長渕の歌を。魂込めて、生きなきゃいけない。だって、そうしなきゃ、つまらないだろう。

汗を流せ。無駄に頑張れ！頑張れ！頑張れ！頑張れ！

そして負けない。負けない。負けない。負けない。

俺は生きる、生きる生きる生きる生きる生きる。

五百円硬貨を握り締めながら、呟いていたうろんなことを。ピモスとは何か。誰もわからない。誰も解けない。でも俺はやってみる。ピモスを掴もう。

へい！へい！へい！へい！

俺の中？君の中？ホワイ？誰の中？

貫き通すのだ。俺の命を。

3点野郎にはわかりもしない地平まで、お前たちを連れて行つてやるぜ。俺はピモスを空に見上げる。するとピモスは看板で微笑んだ。俺は光る槍になりピモスへ飛んでいく。硬度10のダイヤモンドになって。ピモスの野郎はいろいろ抵抗したが

「3点」

と絶叫してはピモスは絶命した。

そう。

俺は今。ピモスを掴んで、握りつぶした。

頑張らないなんて、言い訳にしかならない。俺は正直にふんばってみせるさ。何に対して戦ったかはわからないけど。俺は今、何かを倒した。金色に光って、俺の夢をぶち壊した。さあ、進め。いや、もう進んでいる。何をしても何をされても時が過ぎ行くように、自由な素直に生きよう。俺は愚直にそれをやろう。

今、俺は五百円で、何かを買う。でもそれはピモスを超えている。ピモス、馬鹿野郎！俺はお前になんか頼らない。何にも頼らない。

俺はピモスなしで、純粋な俺という自由だけで生きる！スーパールの駐車場が見えてきた。いつもの守衛が挨拶をする。

ふと瞑っていた目を開けて周囲を見渡してみれば、昨日のまんまの室内であった。あれからスーパーで菓子パンなどを買い、家に帰って食べて寝たのだった。買い物の中に面白いものがあって、袋に入ったやきそばであり、これをパンで挟んだりして食べるらしいので、食パンを買って挟んだら、焼きそばパンよりも量が多くおいしかった。そしていつものCDのイヤホンを耳に入れ、いつものまにか寝ていたのであるが、そのとき聴いていた音楽がブラームスの交響曲第二番であり、自分の中ではわかるようなわからないような音楽であった。そのCDには序曲みたくのも収録されてどちらかというところの方が印象深かった。交響曲という以上は大体、第四楽章からなっており、つまり起承転結みたくになっているのである。でも、ブラームスはなかなかそんな構成でわかりやすくは見せてくれないので、何回か聴いてみたが、やはりよくわからなかった。ハイドンの主題におけるトランペット協奏曲だったか忘れたがそういうのがあって、そっちの方がわかりやすかったが、それはハイドンのせいであろう。そういえばチャイコフスキーも「ブラームスはわかん」といつていた。ハイドンもチャイコフスキーも私は大好きであるが、どうも二人とは違うみたいだ。だとしたらどう違うのかってことが気になって、聴いている内に寝たのである。

いつのまにか、私の中からピモスがふーっと抜けていたが、どうも私は勘違いしていたようで、ピモスとは何も到達地点ではなくて私とは別の超宇宙的な何かなのである。それは宇宙線かもしれない。それを私はピモスといっているだけであり、それそのものでは何も意味もないものだと思う。どうしてこういうことを確言できるのかという勘である。もちろん、そうではないかもしれない。私は、そんなことよりもブラームスのことがまた気になったので聴いてみることにする。

やけに長い第一楽章だなあ、と思っっているうちに眠ってしまった。そこで見た夢が、私はどこかのマンションで住んでいて、仲間みたいなのがそこはよく出入りするところで、室内は広く和風でちょっと高級な感じがしており、私はそこで何か文化人的な顔をして生きているみたいであった。ベランダに出ると女の子がいて中国ではもつと柵とか適当だよ、みたいなことをいう。ベランダとか高所ではそんなに安全に気を使うことはないという意味らしい。私は、ベランダから室内に戻り、髭が生えた男の人に鍵を渡して、彼も何かすごい人らしいが、どんな人だったかは忘れたが、何人かで料理を作つて畳の部屋の高そうな木製テーブルに、しゃれた器に入つた食べ物載せて食べていた。

そこで目が覚める。今のは、実は私の理想の生活かもしれないな、と心の中で呟き、トイレで用を足し、またブラームスを聴く。ブラームスは、当時流行だったワーグナーに對抗する、という気概のあつた人だという。ワーグナーって、「ジャーン、ジャジャーン！ズツババーン」となって、勇壮な感じがいつまでも続く、みたいな感じだが、ブラームスは、そうではなく、ゆっくりとたおやかな感じで、急に盛り上げるといふ風である。さっき私が見ていた夢と関係があるのかもしれない。優しい川の流れの中にいるような。あのマンションも川に面していた気もする。もうちょっと聴かないとわからないが、苦難を通り越してたどり着いた優しさというものを表現しようとしたのだろうか。悲しみがあり、そして激情があり、そして慰めがある、その三つが濁流の中で、規則正しく渾然一体となっている。その三つがうじゃうじゃやっていると霧囲気がある。のたりくらりとどこまで行ってもそのまんま濁流のように、すすきりと切れずに、高潮してまた沈静化して、の繰り返し。

それからテレビをつけてみたら、金麦のCMがやっていて壇れいという先ほど紹介した女優が人妻らしい演技をしていたが、彼女の40歳近くになった色気とは別の何だかわからない不純物を今、私は感じている。これこそ動物パワーとでもいうべきものであるうか何か漂白された美しさ、宣伝に使われるものとは別に野獣性とでも表現するしかないようなそんなものがあって、私はすぐにテレビを消してそのことを妄想することにした。彼女の中にはもつと濃いダクダクとした汚れたものがある。と確信せざるをえないものがあって、それはたとえば、乱雑なる私の部屋の無秩序にも似ている。どこかで「こんな新婚ない」と思わせる。

それは宣伝を仕掛ける側の戦略の可能性もある。明らかにわかりきっている嘘をいいクオリティーで提供しておいて違和感も同時に出しておき、そしてまた宣伝を見せるようにすると。ダブルミーニング、二重の意味である。この壇れいという人もまさにそういう人なのであるう。だからこの人は放っておいても、幸福であり同時に不幸であるような生活を送れる人なんだと思う。

たとえば、ものすごく笑顔で迎えておいて、部屋に入ったとたんにいきなり殴ってくる、みたいな空気さえありそうだ。それでいて明るいまいたいな。明るい暴力みたいな。何じゃそれ、という感じであるが、まさにそうでありながら、一緒に高揚する感じ、これこそワグナーではないだろうか。ワグナーは、現代では彼女に宿っているのだ。それに対抗するには、私はブラームスにならなくてはいけない。ワグナー的な迫力に対して、どこか老荘的な静けさで対応しなくてはいけない。そう、それはまるで、動と静との戦いであり、柔良く剛を制するの柔になったようなもので、彼女の中の奔流をうまくかわして、彼女はその能力を外に活かせるようにすればいいのだ。

私はそのエネルギーをうまくかわして、家の中でグルグル回転させて、その回転力を用いて、私自身の発電源としたい。現に今、私は彼女のパワー、これはピモスともいえそうであるが、をうまく自分の体内で咀嚼して、自分のものに変えようとしているではないか。それはまるで精神的に喰らう、というのにも似ている。

話は宣伝に戻るが、二重の意味を思ったファンはもう一回見てまた二重の意味を感じるが、それを言語化できない。その上で、この結婚報道を知り、三重の意味に苦しむことになる。新たに加わった意味は、変態という意味であることは私の前の小説の文を読めばわかるだろう。

ちなみにこれは私の妄想する彼女であり現実とは何の関係もない。現実では存外普通なのであるが、像としてはそういう可能性もあるのではないか。ということであり、そうであったら楽しいなあということであり、ファンはそういう誤解する権利を有しているのだ。ちなみに私もファンであり、そう考えると四重の意味が出てくる。つまり「現実は違うんだろなあ」という。ここにおいて、彼女のイメージがいくつにも別れるそれこそ島宇宙のように。でも、こういったことこそピモスなのだからしょうがない。妄想というものは形になりそうで形にならない、というよりも形になったらおしまいよ。というものののだ。寅さんが

「それをいつちゃあおしまいよ」

というのにも似ている。つまり、逆にそれをいうことによって事態を混乱させてもいい。彼女は清純であり野獣であり変態であり実は普通でもあるのだ。この錯乱したあえて百花繚乱とつけたいがそんなイメージの中をたゆたって、私は彼女への妄想を述べるのを終わりにしたい。

するとドアを叩く音がした。私は起き上がりジャージを着て、玄関まで行くと、そこにはダブルの背広を着て、やけに恰幅のよい、目つきがやわらかく、声が低くてよく響く感じのまるで大物タレントもしくは政治家のような六十代くらいの男がいた。

「やあ。正夫君。

とうとうやってきたよ。

この部屋、なかなかいいねえ」

ときなり私を押しつけて部屋に入ってくる。

「どうぞだい。

ここじゃあ何だから、近所のレストランで食事しながら話さないかい。

もちろん僕のおごりだよ」

「はあ。

ところで、あなたはどなたなんですか」

窓から外の景色を見ていた男は、笑みを浮かべていった。

「決まっているじゃないか。

僕はピモスだよ」

四街道にあるメガドンキのインドカレー屋に私とピモスはいた。  
ピモスは、

「たまにはインドカレーもいいもんだね」

というプローションカレーにするようだった。どうしてかという  
私が薦めたからだ。本当はカツカレーセットを頼むと、プローション  
レー+カツなのであるが、ピモスは、胃が悪いみたいで、そんなに  
カツを食べたくないようであった。

「インドカレーって、でも、内臓にも効くかもしれないですよ。」

俺、この前、この店でカレーを食べて、一日中、内臓がカツカ  
し感じだったんですもの」

相手があまりにも大物然としているので自然、敬語になる。

「そうか。まあ、じゃあ、そういうことで頼んでみるよ」

といいカウンターまで行ってピモスは注文してくれた。なかなか  
気の利く人物である。

私が隅の方で座っていると

「随分、隅っこをとるんだね」

といい笑いながら向かい合って座った。

「さて、と」

ピモスは私を見つめる。

「私に何か質問でもないのかね」

「まあ、もう、俺とりたてて、ピモスってものに興味がないんです  
よ」

「ほっ」

「だって、わかっちゃったんですよ。ピモスってつまり神ってこと  
でしょう。で、日本にはっていうか世界にはたくさん神がいるっ  
てことでしょう。俺が遭遇したのはその中の一つであって、大した  
ことじゃない。ってことなんですよ」

「そうだよ」

というとピモスは、煙草を吸った。

「僕もね、君の小説を読んで、同じことを思い、もし君がたったひとつしかないピモスのことを思い悩んでいるのなら、違うんだよ、といおうと思つてここにきたんだけど、知っていたね。」

これは弱つたなあ」

「いいんですよ。」

俺、わかつたんです。

どう転がつてもどこかにピモスはいると」

「そうだよ。」

いろんなピモスがいるよ」

「正解はないと。」

あるのは徹底的な忘我、消失の感覚だけだと」

「人はそれを光明とも呼ぶけどもね」

「誰にもあるんですよね。」

言い換えれば、一億総ピモスなんですよね」

「そうだよ。」

一億総ピモスだよ。」

君もわかつてきたね」

「ええ。」

でも、わかつている人は初めつからわかつているんですよ。まるで、青い鳥の物語みたいに、実は自分の家の中にあつたのが青い鳥だったと」

「そうだね。」

でもピモスにはいろいろあるからね」

「あるんですよね。」

でも、なかなか多くのピモスを積極的に使つてゆくという発想には行かないですね」

「そうなんだよね。」

あるピモスを掴めてもそれは一瞬でしかないから、そうでないと

きは別のピモスで行く。今日は青いピモスだけど、昨日は赤いピモスだった。ということもあるんだよね。そこはだから、これはあんまりいっちゃいけないことだけと、下手に宗教に目覚めない方がいいってこともありそうなんだよね」

「ありえますね」

「ある一つのピモスに固執しちゃうでしょう。でも、ピモスって本来はそういうものじゃないんだよね」

「そうじゃない。一神教だとちょっと間違えますよね」

「間違うんだなあ。」

「っていつか、一神教の場合は、違う方法で行くしかないのかもじゃない。俺たちみたいに多神教だとピモスがよりどりみどりなわけじゃない。」

「そのときで使い分ければいいんだよね」

「そうそう」

二人とも同じことをずっと思っていたようで、話はまったく対立することもなくスムーズに進んだ。やはりピモスだけのことはあると私は感心した。

## ピモス 30 最終回

私はカレー屋のカレーを食べながら、ピモスとピモスについていろいろ語っていたが、語っているうちに、ピモスというものの輪郭が何となくつかめてきた。これは勘違いかもしれないが、つまり、思うように生きていいんだよ。というだけの話であり、そのことについてピモスはいった。

「つまりは、赤ピモス、青ピモス、黄ピモスなんだよ。」

どの色を選ぼうが自由という意味だね」

私はそれをきき、プローンカレーを食べ、口の中に広がっているまったりとした優しい味を再確認して、

「ああ幸せだわ」

と呟いた。

「僕も幸せだよ。」

こんなに話のわかる相手と出会えたんだからね」

「ところでこのカレーおいしいでしょ」

「おいしいねえ」

私はもうピモスに対して何も言う事がなくなってしまった。もうこれ以上何が必要だというのだろうか。ひょっとしたら逆にピモスにきいてみてもいいかもしれない。

「あの。」

もう俺からは何もありませんよね。

そちらで何かありますか」

「うーん。」

そうだねえ。

強いていえば、うーん。

ないなあ」

「ないですよね」

私は満ち足りた感じでしたら座っていた。ピモスは黙ってカレ

ーを食べていた。そして立ち上がる。

「それじゃあ。」

僕は買い物をして、家に帰るよ。」

「えっ。」

ピモスさんは近所に住んでいるの。」

「意外に近所だよ。」

「そうなんだ。」

「たまには会いにくるからさ。」

君が迷ったときにはね。」

「そうですね。」

ちなみに、あなたが迷うということはあるんですか。」

「あるよ。」

「あるんですか。」

「でも、それもまたピモスと思うことにしているね。」

「そうなりますか。」

「ああ。」

「そうだよ。」

「じゃあ、お元気で。」

「はい。」

というときピモスは、代金を私の分まで払ってくれて、人ごみの中に消えていった。私は、一時間くらいしばらくじっとスプーンを手にしてカレーを見ていた。その一時間間に、私の中で何が起きたのかはわからないが、ふと正気になって、カレーを食べると、今まで感じたことのないおいしさになった。

(完)

## あとがき

何かを書かなくてはいけないみたいで、というのも最終回で終わりにしなくてはいけないのに完結するってボタンを押さないというミスをしたためであり、これはしょうがないなあ、と思いつつも、じゃあ何を書こうかというと特に何もなくて、まあ、最近、ブラームスを聴いているけどさっぱりわからんとか書いても、それは読んでいる人は知っているわけだからねえ。だから、俺は最近、情報こそすべてだみたいな科学的発見があつて、神はいないという不完全定理もカシツと決まったわけだから、小説こそもう何でもいってわけで、それだったら本当に不条理なものを作りたいなあと思つているけど、なかなかそこまでジャンプできないけどいつかは、ゴール地点としては、何のことやらさっぱりわからんが完璧なる文学だみたいな領域まで跳んでみせるというか本作でもかなりそれはやっていて、俺の中ではこれはいいものだといえる。逆に普通の小説とかしか知らない人が急にこの小説呼んでもわけわからないのは当たり前でありこの小説つてそもそも俺もわけわからないように書いているわけで、そんなもの他人にわかるものじゃないんだけど、でもさ。俺が思うに小説つてそういうものなのに、何でみんなあわかりやすくするのかなあ。意味もなく人を殺したり泣いたりするわけでしょう。そんなのとあとやたら可愛い女とか出してイリやあいんだみたいなさ。まあ、俺もそんなんいつたらミルク少女つてのはそういうわけなんだけど、あれなんかも脱恋愛だからね。ひよっとしたら下宿のおばさんとやる小説かもしれないよ。そこを軸にするみたいだね。俺そついうの好きだからね！つて関係ないけど、そろそろ放置している小説 中野を完結させ泣きゃなあ。友人と会う予定を立てて、それで終わりに使用とは思っている無限や金をあどうするかなんだよね。その次は。わからんけど、何とかばんとふんばつ

てオワリニしてゆこう。そうするしかないからね。よくできた小説  
つてのは同時に絶対に意味はないわけで、わかりやすくまとめよう  
とするんだよ。今の日本のしょうせうとかあまちゅあとかさ。そう  
じゃなくて、俺は、だって自然主義が出てきた要因とか考えれば、  
小説つてのは「わからないもの」にどうするか、つてことであり、  
絵だって、いかにキャンバス全部見せるかなわけであって、小説だ  
つていかに全部見せるかでしょう。もう見せちまえば、あとはどう  
なっているのかはわからなくてもいいんだよ。つてかわかりやすく  
まとめないで、何だかわからんがこれはひとつの経験だった。でい  
いんだよなあ。それ以上でもそれ以下でもないわけでしょ。現実つ  
て。小説を嘘というひともいるが、当たり前だけど認識としては嘘  
つて認識はなくて物語的に認識するしかないわけで、それは必然的  
にどんな嘘も真実になりうるわけで、もう小説の中で何を書いても  
それは小説内では本当なわけで、では、それを我々の現実認識とど  
う照らし合わせさせるかってのが、小説の目指す効果ならば、たん  
なりありていーだけではなくてmまったくの嘘つばちつて方向性か  
らでもリアリティーを創造できるわけで、それを探求するつてのも  
いいかもしれない。嘘でもあるし真実でもあるみたいな。でも、わ  
からなくするつてそういうことだよな。嘘のある小説つてのはつま  
り陳腐なわけでしょう。拙劣でもそれでいいなたくさんだよ。俺は  
もうそれでいい。でつきかくわ・でいいんだけどね。何を書こうと  
しているんだっけか。疲れるな。嘘。本物というよりも何か、つて  
ことをいおうとしているうてことなんだろうな。そんな二元論じゃ  
収まりきれないのでそれをせり出しているそれをどうするかつてこ  
となんだわ。それを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8070s/>

---

ピモス。

2011年8月2日03時32分発行